

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第201集

越中畠IV・越中畠V遺跡 発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

越中畠IV・越中畠V遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の下に開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成3年度と平成4年度にわたって発掘調査した越中畠IV遺跡および越中畠V遺跡の調査結果をまとめたものです。越中畠IV遺跡および越中畠V遺跡は鬼ヶ瀬川と本内川が形成する舌状の洪積段丘上に立地し、調査の結果、縄文時代の焼土遺構、近世の掘立柱建物跡などが発見されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、湯田町教育委員会をはじめとする関係各位に真心より謝意を表します。

平成6年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工 藤 嶽

例　言

1. 本報告書は岩手県和賀郡湯田町越中畠第64地割65他に所在する越中畠IV遺跡、および岩手県和賀郡湯田町越中畠第64地割133-16他に所在する越中畠V遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2. 本遺跡の調査は、東北横断自動車道秋田線の建設に伴って遺跡の一部が消滅するために、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次の通りである。

遺跡番号・略号 MD 67-2297・E C IV-92

遺跡番号・略号 MD 67-2384・E C V-91, E C V-92

4. 調査面積は越中畠IV遺跡が400m²、越中畠V遺跡が平成3年度が2,000m²、平成4年度が4,600m²である。野外調査は越中畠IV遺跡が平成4年7月13日から8月7日、越中畠V遺跡が平成3年8月21日から10月16日、平成4年5月11日から7月10日、8月11日から9月18日にわたって実施した。調査資料の整理作業は平成3年11月25日から平成4年3月31日、平成4年の11月1日から平成5年3月31日まで実施した。

5. 発掘調査は、越中畠IV遺跡が伊東格・小山内透、越中畠V遺跡は平成3年度が遠藤修・引屋数学、平成4年度が伊東格・小山内透・柳田磨が担当した。室内整理作業および報告書の作成は、平成3年度分を遠藤修、平成4年度分を伊東格が担当し、報告書の執筆は第I章を三浦謙一、第II章の2を佐瀬隆、その他の平成3年度分を遠藤修、平成4年度分を伊東格が担当した。

6. 各種鑑定と分析は下記の方々にお願いした。

石材鑑定 佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）

樹種鑑定 高橋利彦氏（木工舎「ゆい」）

花粉分析 杉山了三氏（盛岡第一高校）

7. 野外調査にあたっては、湯田町教育委員会、北上市教育委員会、花巻市教育委員会および地元の方々の御協力をいただいた。

8. 本遺跡から出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

例言

本 文

I. 調査にいたる経過.....	2	6. 遺構外の出土遺物.....	19
II. 立地と環境.....	2	7. まとめ.....	23
1. 遺跡の位置.....	2	V. 越中畠V遺跡.....	31
2. 遺跡周辺の地形と地質.....	3	1. 遺跡および周辺の地形.....	35
3. 周辺の遺跡.....	5	2. 基本層序.....	35
III. 調査と室内整理の方法.....	5	3. 焼土遺構.....	36
1. 調査方法.....	5	4. 炭窯.....	39
2. 室内整理方法.....	8	5. 土坑.....	44
IV. 越中畠IV遺跡.....	9	6. 溝跡.....	46
1. 遺跡周辺の地形.....	15	7. 遺構外の出土遺物.....	47
2. 基本層序.....	15	8. まとめ.....	58
3. 掘立柱建物跡.....	16	VI. 分析・鑑定の結果.....	59
4. 柱穴状土坑.....	16	1. 湯田町越中畠V遺跡出土材の樹種.....	59
5. 溝跡.....	19	2. 湯田町越中畠V遺跡の花粉分析.....	60

図 版

第1図 岩手県全図.....	1	第3図 平鹿盆地付近の地質図.....	4
第2図 平鹿盆地の東西両縁部 を含む東西断面図.....	3	第4図 鬼ヶ瀬川流域の段丘面分布図.....	5
		第5図 周辺の遺跡.....	7・8

表

第1表 周辺の遺跡一覧表.....	7
-------------------	---

図 版

越中畠IV遺跡	
第1図 越中畠IV遺跡周辺の地形図.....	11・12
第2図 越中畠IV遺跡の遺構配置図.....	13・14
第3図 越中畠IV遺跡の基本層序.....	15
第4図 1・2・3・4号掘立柱建物跡	17・18
第5図 1・2・3号溝跡.....	20
第6図 出土遺物-1.....	21
第7図 出土遺物-2.....	22

写 真 図 版

越中畠IV遺跡			
写真図版1 調査区全景基本層序	27	写真図版3 1・2・3号溝跡	29
写真図版2 挖立柱建物跡群	28	写真図版4 出土遺物-1	30

表

越中畠IV遺跡			
第1表 柱穴状土坑計測値一覧表	16	第2表 越中畠IV遺跡出土遺物一覧表	22

図 版

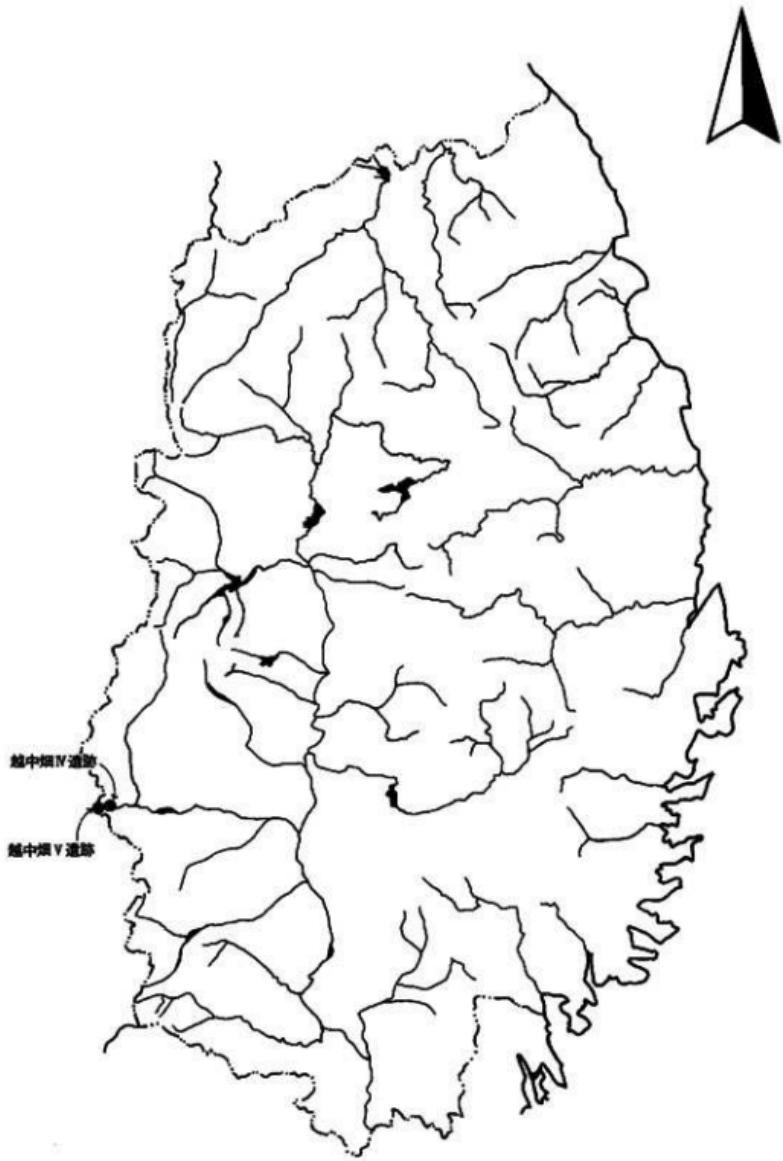
越中畠V遺跡			
第1図 越中畠V遺跡周辺の地形図	33	第11図 1号溝跡	46
第2図 越中畠V遺跡遺構配置図	34	第12図 遺構外出土遺物-1	48
第3図 越中畠V遺跡の基本層序	35	第13図 遺構外出土遺物-2	49
第4図 1号焼土遺構	36	第14図 遺構外出土遺物-3	50
第5図 2号焼土遺構	37	第15図 遺構外出土遺物-4	51
第6図 4・5・6号焼土遺構	38	第16図 遺構外出土遺物-5	52
第7図 1号炭窯	40	第17図 遺構外出土遺物-6	53
第8図 2号炭窯	41・42	第18図 遺構外出土遺物-7	54
第9図 3・4号炭窯	43	第19図 遺構外出土遺物-8	55
第10図 1・2・3・4号土坑	45		

写 真 図 版

越中畠V遺跡			
写真図版1 調査区全景	69	写真図版9 遺物出土状況	77
写真図版2 遺跡近景・基本層序	70	写真図版10 遺構外出土遺物-1	78
写真図版3 1・2号焼土遺構	71	写真図版11 遺構外出土遺物-2	79
写真図版4 3・4・5号焼土遺構	72	写真図版12 遺構外出土遺物-3	80
写真図版5 1号炭窯跡	73	写真図版13 遺構外出土遺物-4	81
写真図版6 2号炭窯跡	74	写真図版14 遺構外出土遺物-5	82
写真図版7 3・4号炭窯跡	75		
写真図版8 1・2・3・4号土坑、1号溝跡	76		

表

越中畠V遺跡	
第1表 越中畠V遺跡出土石器一覧表	56・57



第1図 岩手県全図

I. 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長 107 km の高速道路である。このうち、第 9 次・第 10 次施工命令区間は北上ジャンクションから秋田県境までの延長 33.9 km である。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については岩手県教育委員会が昭和 56 年から分布調査を行ってきたが、日本道路公団仙台建設局からの分布調査結果の照会に対して昭和 62 年 5 月に回答している。それに基づいた両者の協議の結果、やむを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

昭和 63 年以降、岩手県教育委員会が日本道路公団建設局に発掘調査事業について照会して回答を得たのち、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会、鶴岩手県文化振興事業団の三者の協議を経て、鶴岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査事業を実施することとした。

越中畠 V 遺跡の調査は、昭和 63 年 12 月及び平成元年 1 月に行われた三者協議に基づいて平成元年度に実施を予定し、4 月 1 日付け委託契約により着手することとした。しかし、上物補償などの未解決の問題が残ったため、次年度以降に調査を延期することになった。

その後、平成 3 年 2 月付けで、鶴岩手県文化振興事業団が平成 3 年度埋蔵文化財調査事業の通知を岩手県教育委員会から受け、4 月 1 日付けの契約によって発掘調査に着手した。しかし、上物補償などが一部未解決でさらに残ったために、調査対象面積 6,300 m² のうち、2,000 m² を調査し、残りは次年度に繰り越すこととし、平成 4 年 4 月 1 日付け契約により、残り 4,300 m² を調査した。また、越中畠 IV 遺跡の発掘調査は平成 4 年度新規事業として計画され、平成 4 年 4 月 1 日付けの契約により、400 m² を対象にして実施された。

II. 立地と環境

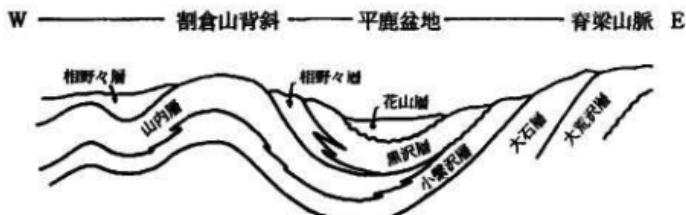
1. 遺跡の位置

本遺跡の所在する湯田町は岩手県中央部の西端に位置し、東は北上市、西は秋田県雄勝郡東成瀬村、同県平鹿郡山内村、同県仙北郡六郷村、北は同県仙北郡千畳町、岩手県和賀郡沢内村、南は岩手県胆沢郡胆沢町と境を接している。同町は奥羽山脈の山間部を開けた沢内盆地の中央にあり、周囲を同山脈の山々に囲まれている。主な山嶺は、北から女神山(956 m)、割倉山(770 m)、白木峠(601 m)、三森山(1,102 m)、蠍巣山(1,155 m)、三界山(1,381 m)、南本内岳(1,486 m)、焼石岳(1,548 m)、牛形岳(1,389 m)、鷲ヶ森山(1,207 m)等である。町の総面積の 82 % が山林であり、11 % が原野で占められている。和賀岳(1,440 m)に源を発した和賀川は湯田町中

部を南流したのち、川尻付近で直角状に折れて東流する。川尻を中心に、北に湯本、湯田、左草、下前、西に柳沢、新田郷、南に湯川、鶯之巣、大石、草井沢などの集落は、和賀川とその支流である数本の川が開析した段丘の上に散在している。気候は裏日本式で、県内では最も雨量が多く、豪雪地帯として知られている。JR 北上線が町の中央を横断し、湯田錦秋湖・ほつとゆだ、ゆだ高原の3駅がある。国道107号（通称平和街道）がこれとほぼ並走する。

2. 遺跡周辺の地形と地質

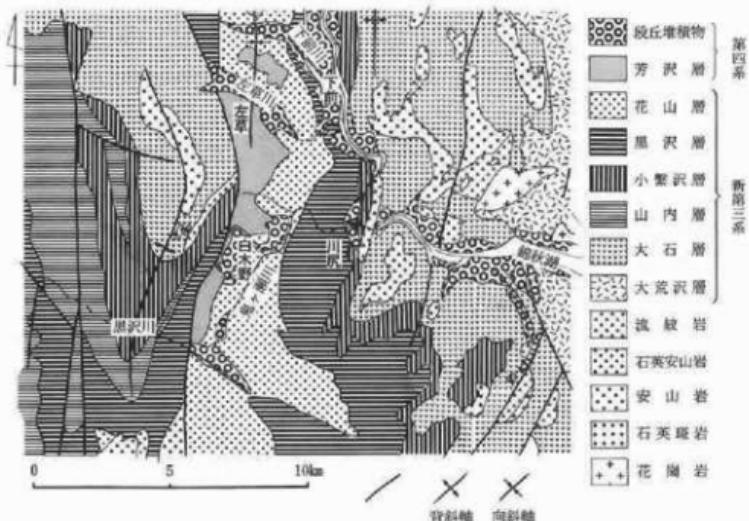
奥羽脊梁山脈は、東北地方を450 km におよび南北につらなる一大山脈である。それはユーラシアプレートと太平洋プレートの境界である日本海溝にほぼ平行しており、プレート押力の結果として生じた大きな背斜構造としてとらえられるが、細かくみればそれぞれ地形的山脈と対応した雁行配列を示す小単位の背斜構造に分解される。たとえば、遺跡の位置する湯田町が含まれる地域は、南に向かって高度を下げる西側の和賀岳、割倉山背斜から逆に高度を上げる荒沢森背斜への脊梁山脈の移行部にあたる。両背斜間に花山向斜が存在し、平鹿盆地と呼ばれる地形的凹地に対応する（第2図）。なお、このような構造的特徴は、当地域に奥羽脊梁山



第2図 平鹿盆地の東西両縁部を含む東西断面図(長谷地質調査事務所(1983))

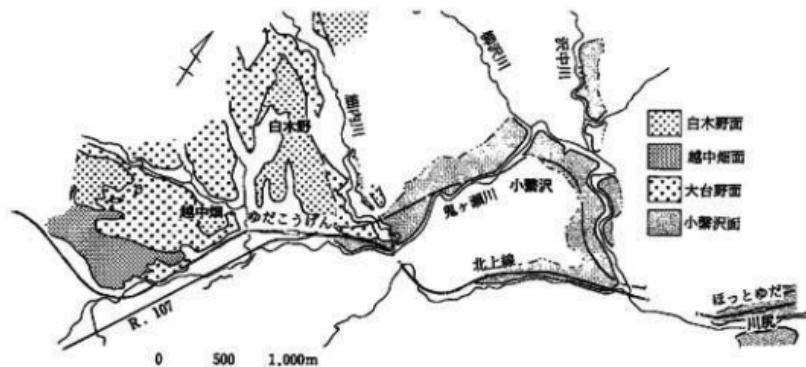
脈中で最も低い分水界（285 m）が存在することと無関係ではなかろう。河川の流向も地質構造の支配をうけている。北上川の主要支流の一つである和賀川は、その下流部において上記移行部の相対的低地を東西方向に流れる。荒沢森背斜を横切る和賀仙人では先行谷的性格の峡谷を形成している。一方、上流部では構造軸に平行に南流する。

第3図は湯田町付近の地質分布を示す。背斜部は主に第三系中新統下部、大荒沢層、大石層、小森沢層などのグリーンタフ系の凝灰質岩により構成される。向斜部、平鹿盆地には、前記のグリーンタフ系の凝灰質岩を基盤として、砂岩を主とする中新統上部の黒沢層、同じく砂岩を主とする中新統上部へ鮮新統の花山層が堆積する。これらを不整合に被る未固結の砂礫、粘土を主とし亞炭化した泥炭層を伴う第四系の花山層が堆積する。芳沢層は層状地堆積物の層相を呈する。



第3図 平鹿盆地付近の地質図(長谷地質調査事務所(1981)による)

第4図は、遺跡の位置する鬼ヶ瀬川流域の地形分布図である。段丘は白木野（新称）、越中畑（新称）、大台野（Toyoshima, 1984）、小繫沢（Toyoshima, 1984）の4面に区分される。大台野、小繫沢の両面の形式には最終氷期後半の気候変動が関係する（Toyoshima, 1984）。すなわち、小雨寒冷気候下で、河川の運搬力を上回り供給された砂礫などから厚い谷堆積物が形成され、その後、気候の温暖湿润化に伴い、河川の浸食力が増加することで、まず、谷堆積物を構成層とする大台野面の離水が生じた。さらに勾配のより小さい流路にそっては、側方浸食も働いて谷堆積物を浸食面とする小繫沢面が形成されたと考えられている（Toyoshima, 1984）。埋積から浸食への転換期は、約2万年前と推定される（Toyoshima, 1984）。両面は中川ほか（1971）の川尻段丘に相当する。川尻段丘は和賀川下流域の金ヶ崎段丘に対比される（中川ほか、1971）。細内川と越中畑川に挟まれた約310 mの定高性を示す丘陵を白木野面と呼称する。黒沢層、花山層を基盤とし、芳沢層を水平にのせる。未固結の砂礫、粘土を主とする芳沢層は白木野面の構成層と考えられる。同質の地形面は、越中畑川右岸にも残存し、さらに、北方の柳沢、左草地区にも分布が認められる。また、県境付近の北上線の北方隣接域に約290 mの定高性を示す扇状地形が存在する。北上線が通る県境の谷からかつて流出していた鬼ヶ瀬川へ



第4図 鬼ヶ瀬川流域の段丘面分布(Toyoshima(1984)に一部加筆)

合流していた河川により形成された扇状地と考えられる。この河川は、その上流部を黒沢川の支流である田代沢により奪われ半ば死んでいる。なお、越中畠V遺跡は白木野面と越中畠面にまたがり、また、越中畠IV遺跡は大台野面に立地する。

3. 周辺の遺跡（第5図）

岩手県遺跡登録台帳によれば、湯田町では現在までに51の遺跡が登載されている。このうち発掘調査された代表的な遺跡は大台野遺跡(37)である。大台野遺跡は旧石器時代から弥生時代にかけての複合遺跡であるが、県内において調査された旧石器時代の遺跡の代表的なものである。ナイフ型石器、彫刻刀型石器、搔器など1万余点が出土している。平成2年度には本遺跡も含めて東北横断自動車道秋田線建設関連の遺跡発掘事業が始まり、塙野I遺跡(11)・塙野II遺跡(12)・大渡遺跡(25)・大渡II遺跡(26)、白木野I遺跡(31)・白木野II遺跡(32)・白木野III遺跡(33)、越中畠IV遺跡(42)・越中畠V遺跡(43)が調査されている。

III. 調査と室内整理の方法

1. 調査方法

(1)地区割

越中畠IV・V遺跡の調査地区割は調査が2カ年度以上にわたること、調査範囲が広範囲であること、両遺跡が隣接することなどから、調査を統一的に把握でき、共通のグリッドにのるよう以下のように行った。

公共座標軸第X系上の X = -78,500.000 と Y = -9,500.000 を基準線とし、その交点を原点とした。原点から南 140 m、東 80 m の地点を基準点 1、南 140 m、東 40 m の地点を基準点 2 とした。原点を基点として南北、東西に平行する直線で 100 m 毎に区切り、大区画とした。大区画をさらに 4 m 每に区切り、小区画とした。区画の名称は大区画を西から東に I、II、III…、北から南に A、B、C…とし、区画名を A I、B II…とした。小区画は大区画ごとに西から東に 1、2…25、北から南に a、b…y とした。従って、小区画の呼称は A I b 2 区、C III d 4 区…のようになる。但し、越中畠 IV 遺跡については調査区が狭小であるため、区画の呼称に大区画名を付さず、e 5 区、f 6 区のように表した。

(2)粗掘り・精査

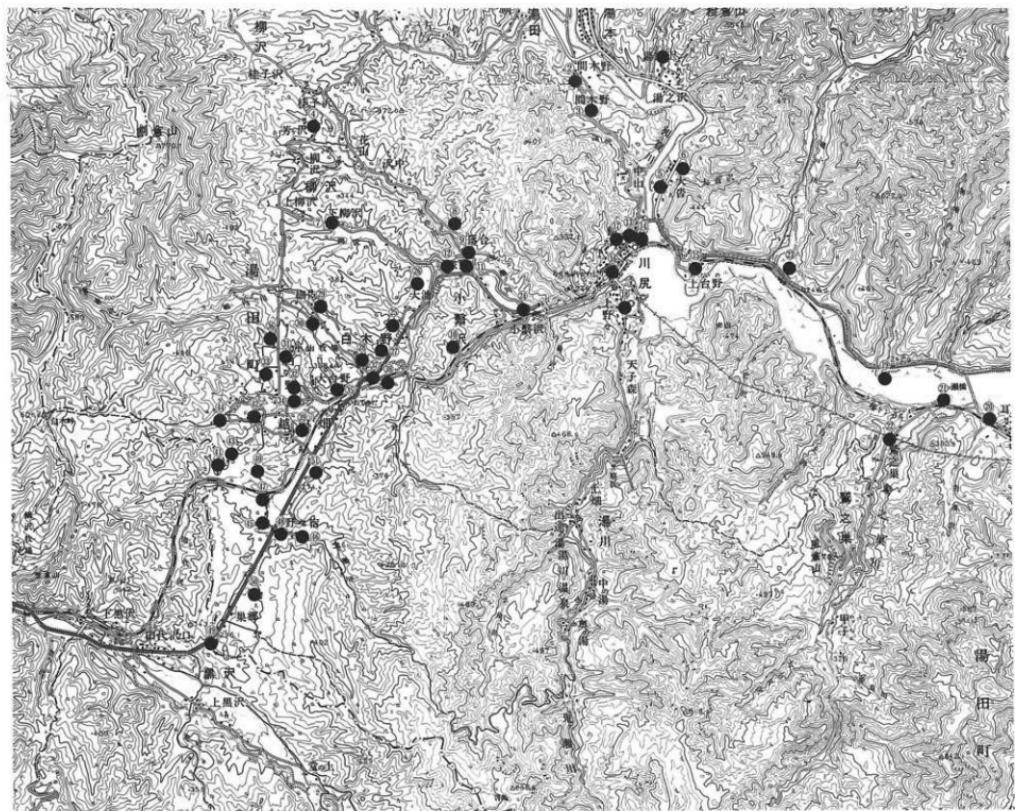
調査区の現況は山林や藪であるため、雑木の撤去や焼却作業からはじめ地区割と平行し試掘トレーナーをいれながら遺構検出を進めた。表土除去作業には人力と重機を併用した。

検出した遺構には遺構名を付し、順次、精査を行った。出土遺物は区画名、層位を記入して取り上げた。

(3)実測は越中畠 IV 遺跡は簡易遺り方測量を用いて、越中畠 V 遺跡は簡易遺り方測量とトータルステーションによる光波測量を併用して行った。実測図は縮尺 20 分の 1 を基本とした。遺構のレベルは 50 cm 間隔を原則とし、必要に応じて計測個所を設けている。写真は 6 × 7 cm 版 1 台（モノクローム）と 35 mm 2 台（モノクローム、カラーリバーサル）の 3 台を 1 組として使用し、検出状況・埋土断面・完掘全景・遺物出土状況などを撮影した。

2. 室内整理方法

室内整理は、遺物の注記からはじめ、次いで接合・復元・石膏入れの作業を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、遺物実測、土器・古錢拓本、遺物・遺構トレースの順に作業を進め、最後に図版や写真図版を作成した。以下の作業と並行して、計測、諸鑑定、原稿作成を行い、報告書に掲載した。



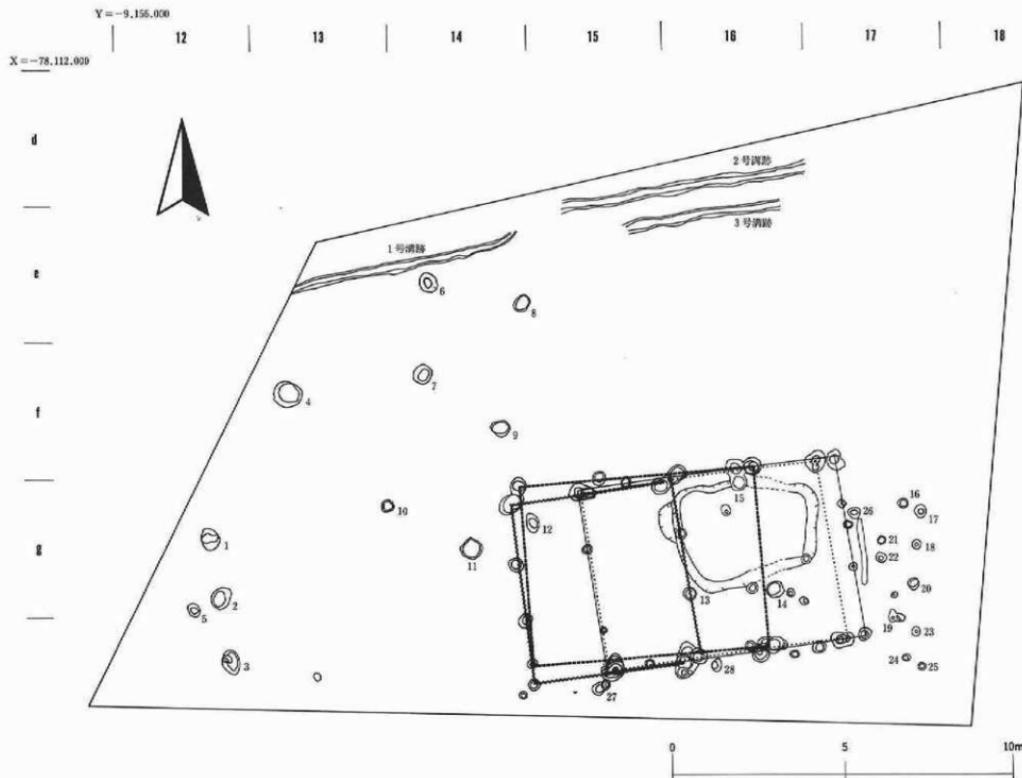
第5図 周辺の遺跡

- ①湯之沢遺跡
- ②間野Ⅰ遺跡
- ③間野Ⅱ遺跡
- ④芳が沢一里塚
- ⑤大曾I遺跡
- ⑥大曾II遺跡
- ⑦柳沢I遺跡
- ⑧落合遺跡
- ⑨小曾沢I遺跡
- ⑩小曾沢II遺跡
- ⑪塙野I遺跡
- ⑫塙野II遺跡
- ⑬川尻館
- ⑭館
- ⑮川尻中学校
- ⑯川尻I遺跡
- ⑰川尻II遺跡
- ⑱上野ノ遺跡
- ⑲安倍館
- ⑳耳取田遺跡
- ㉑八幡館
- ㉒鶴ノ巣遺跡
- ㉓越戸遺跡
- ㉔合野々遺跡
- ㉕大瀧遺跡
- ㉖大瀧II遺跡
- ㉗大波田遺跡
- ㉘大瀧III遺跡
- ㉙細内I遺跡
- ㉚細内II遺跡
- ㉛白木野I遺跡
- ㉜白木野II遺跡
- ㉝白木野III遺跡
- ㉞白木野V遺跡
- ㉟白木野VI遺跡
- ㉞白木野VII遺跡
- ㉞大台原遺跡
- ㉞大台原II遺跡
- ㉞越中畠I遺跡

IV. 越中畠IV遺跡



第1図 越中千石IV遺跡周辺の地形図



第2図 越中畠IV遺跡の遺構配図図

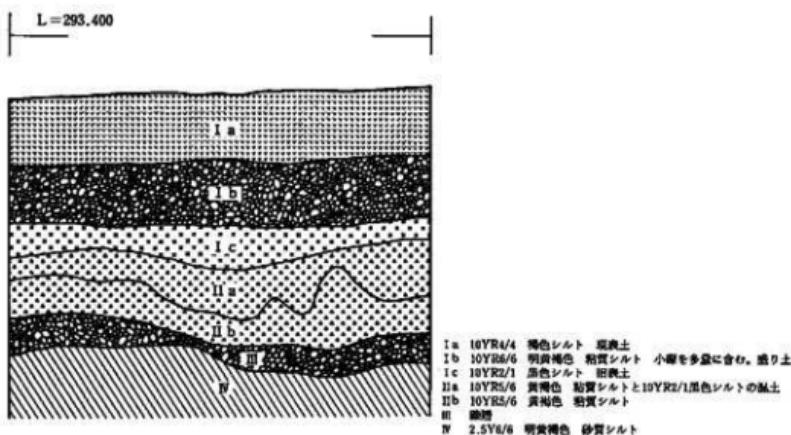
IV. 調査の結果 越中畠IV遺跡

1. 遺跡周辺の地形（第1図）

東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の西約1.7 kmに位置し、和賀川支流の鬼ヶ瀬川によって形成された洪積段丘の大台野面に立地する。調査区は鬼ヶ瀬川支流の越中畠川の南岸にあり、標高は約293 mである。調査区の現況は水田であるが、全面にわたって開田時の整地によつて削平、擾乱を受けている。

2. 基本層序（第3図、写真図版1）

- I a層 棕褐色土 現表土 植物根の混入が多い
- I b層 明黄褐色土 径5~2 cm 大の小礫が多量に混じる。開田時の整地層
- I c層 黒色土 旧表土
- II a層 黒色土と黄褐色土の混合
- II b層 黄褐色土
- III層 粘層 径10~5 cm 大の礫が堆積する。
- IV層 明黄褐色砂質土
- V層 にぶい黄色砂層土



第3図 越中畠IV遺跡の基本層序

3. 挖立柱建物跡

1・2・3・4号掘立柱建物跡

遺構(第4図、写真図版2)

調査区の南東に4棟を検出した。4棟すべてが重複している。1棟が南北棟、3棟が東西棟である。南北棟(1号掘立柱建物跡)はもっとも西にあり、規模は桁行3間(5.4m)×梁行2間(4.6m)である。柱穴の掘り方は円形で規模は径45~35cm、深さ40~35cmである。東西棟のうち、もっとも西にあるもの(2号掘立柱建物跡)は桁行3間(6.8m)×梁行2間(5.2m)と推定され、残り2つの東西棟と東半で重複する。柱穴の掘り方は円形で、規模は径40~30cm、深さ50~30cmである。残り2つの東西棟(3・4号掘立柱建物跡)はほぼ同じ地点で立て替えたものと思われ、規模は桁行3間(7.4~6.8m)、梁行2間(5.4~5.1m)と推定される。柱穴の掘り方は円形で規模は径50~40cm、深さ50~30cmである。3・4号掘立柱建物跡の内側には東西4.0×南北3.0mの、深さ10cmほどの長方形の掘り込みがみられる。柱穴掘り方の新旧関係は明確でないが、ほとんど同時期のものと思われる。

遺物(第6図、写真図版4)

掘り方の一つから青緑釉陶器小皿の口縁部破片1点(3)が出土している。胎土は灰白色で、内面から外面の口縁部まで青緑釉、外面に透明釉をかけ分けており、17世紀末から18世紀前半にかけての肥前産と推定される。

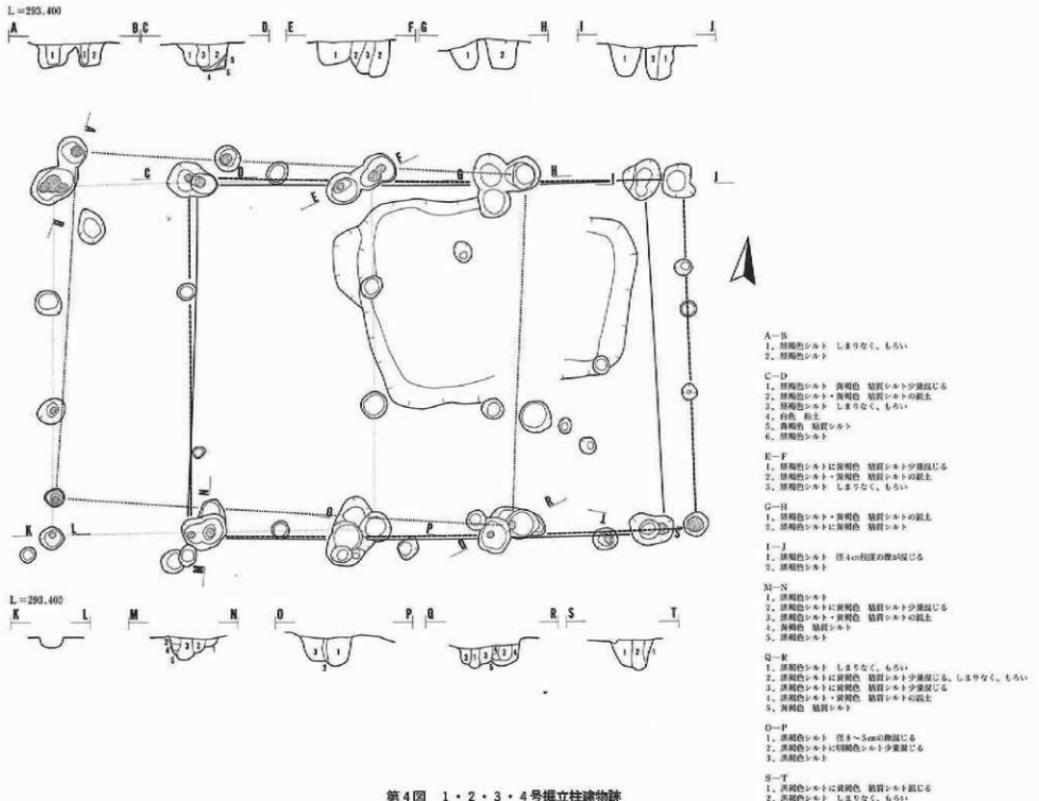
4. 柱穴状土坑群

遺構(第2図、写真図版なし)

調査区の全域にわたって検出された。形状、規模、深さともバラツキが大きく規則性を欠く。出土遺物はない。

第1表 柱穴状土坑計測値一覧表

No	径(cm)	深さ(cm)									
1	67×54	13.5	8	50×48	11.1	15	48×47	38.2	22	30×26	11.6
2	68×54	7.8	9	56×48	6.2	16	29×26	17.1	23	26×24	31.2
3	76×50	12.8	10	35×32	7.5	17	40×35	18.1	24	22×19	18.0
4	83×78	27.0	11	60×60	8.8	18	28×26	28.0	25	25×22	13.6
5	40×33	7.6	12	39×54	15.5	19	50×35	23.0	26	35×34	53.4
6	58×48	67.2	13	39×41	12.5	20	30×30	25.2	27	55×34	28.0
7	59×57	10.5	14	46×48	31.0	21	28×26	4.9	28	38×28	42.0



第4図 1・2・3・4号挺立柱建物跡

5. 溝跡

1号溝跡

遺構（第5図、写真図版3）

調査区の北端にあり、ほぼ東西に走る。西端は調査区外へと続く。規模は長さ6.7m、幅27cm、深さ19cmである。埋土は単層である。出土遺物はない。

2号溝跡

遺構（第5図、写真図版3）

調査区の北端にあり、3号溝跡の北0.6mに位置し、これと平行して東西に走る。規模は長さ5.1m、幅29cm、深さ16cmである。埋土は単層である。出土遺物はない。

3号溝跡

遺構（第5図、写真図版3）

調査区の北端にあり、2号溝跡の南0.6mに位置し、これと平行して東西に走る。規模は長さ4.4m、幅27cm、深さ18cmである。埋土は単層である。出土遺物はない。

6. 遺構外の出土遺物

出土した遺物は総量で小コンテナ1箱である。3の陶器皿の破片1点を除き、すべてが遺構外から出土している。石器を除き、掘立柱建物跡と同時期のものと推定される。

(1)石器（第6図、写真図版4）

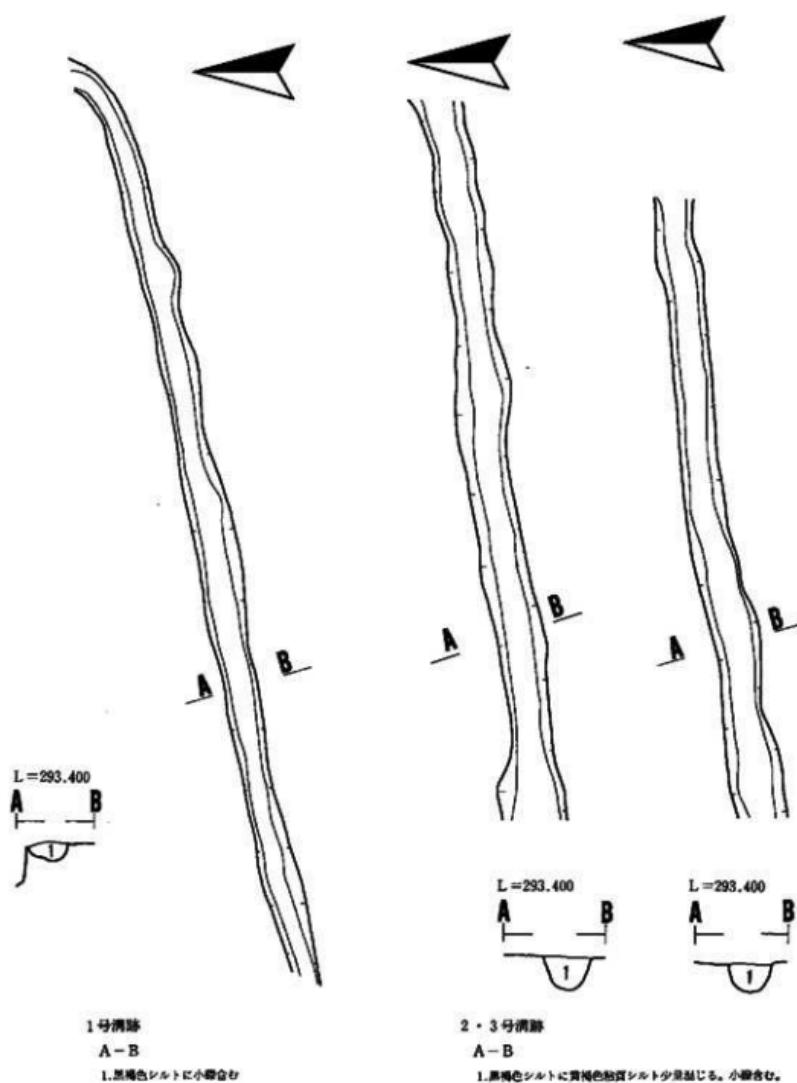
1、2の2点が出土している。1は片面の周辺に連続した刃部調整を施している。図の上部の突起から石筆の可能性もある。2は全面にわたって、擦痕が見られる。

(2)陶磁器（第6図、写真図版4）

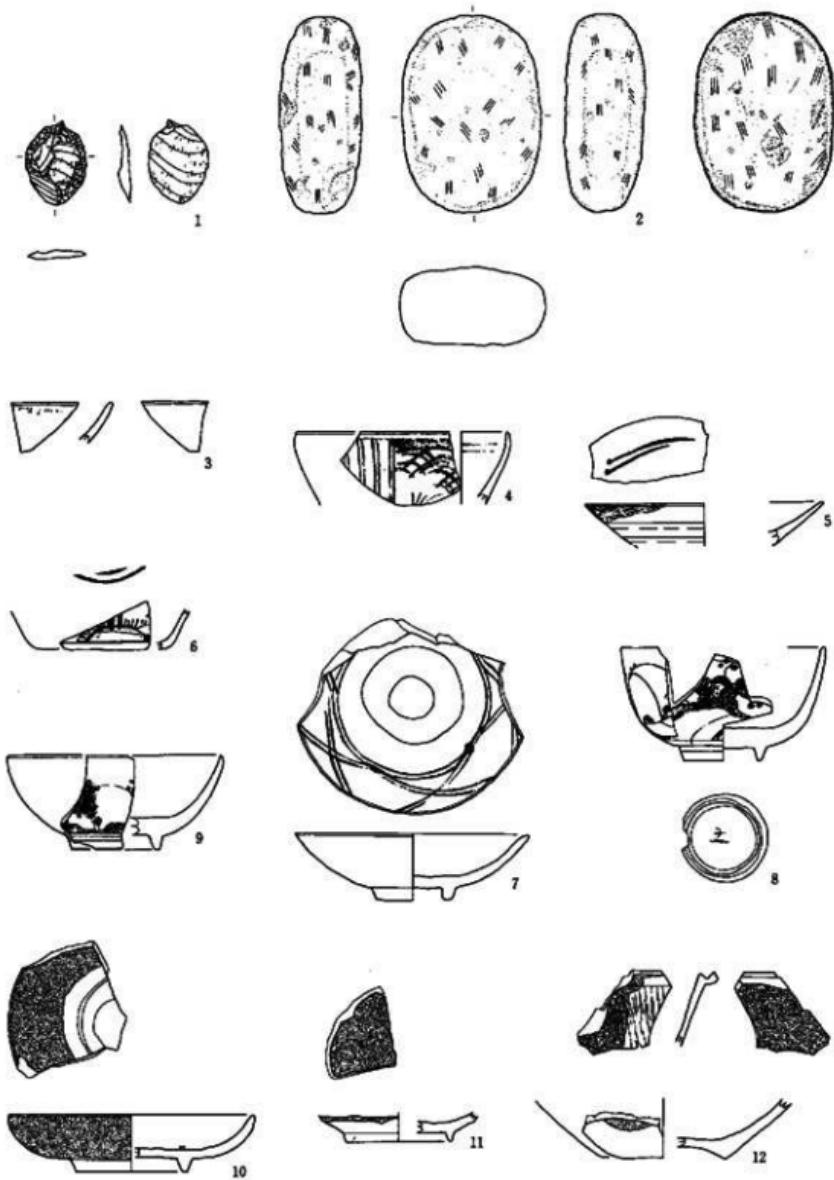
4～12の10点が出土している。内訳は陶器3点、磁器6点である。4～9は磁器破片である。器種は4、8、9が碗、5、7が皿、6が小鉢である。胎土は灰白色もしくは白色である。7の皿は見込みの釉を蛇目状に釉剥ぎしている。8は染付碗で通称「くらわんか碗」と呼ばれている雑器的碗である。18世紀中葉から末にかけての長崎県波佐見窯の産と推定される。9も8と同様の「くらわんか碗」であるが、8よりやや厚手である。10～12は白岩系陶器（現秋田県角館町白岩産、18世紀後半～19世紀終わり）の破片である。器種は10、11が皿、12が片口である。11の見込みには目積みの際の目跡が見られる。

(3)古銭（第7図、写真図版4）

13～15の3点が出土している。いずれも初鋤が18世紀半ば以降の新寛永である。13は裏に波文のある波錢である。



第5図 1・2・3号溝跡



第6図 出土遺物-1



第7図 出土遺物－2

石器一覧表

No	登錄番号	遺構・地点・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	生成年代	参考
1	N17	9001	表土一括	石鎚	4.4	3.1	0.6	7.0	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統 30
2	N18	9002	表土一括	磨石	10.2	7.3	4.3	525.0	輝石安山岩	奥羽山地	新第3系中新統 30

陶磁器一覧表

No	番号	遺構・地点・層位	器種	口径	高さ	底径	胎土	釉薬・繪付	製作地	年代	備考
3	1	20号土坑埋土	陶器皿	5.3	—	—	灰白色	鋼緑・透明	肥前	18C	30
4	2	表土一括	磁器碗	11	(3.9)	—	白色	染付緋色	肥前	不明	30
5	10	表土一括	磁器碗	11.3	5.0	4.7	灰白色	染付	肥前	18C	30
6	6	表土一括	磁器皿	12.6	—	—	白色	染付青色	肥前	18C	30
7	3	表土一括	磁器皿	12.6	—	—	白色	染付青色	肥前	18C?	30
8	31	表土一括	磁器皿	12.4	3.4	3.9	白色	染付青色	肥前	18C	30
9	9	表土一括	磁器小鉢?	—	—	3.9	白色	染付	肥前	不明	30
10	24	表土一括	陶器皿	12.6	3.0	5.6	浅黄橙色	青灰色	白岩系	—	見込蛇目輪はぎ
11	8	表土一括	陶器皿	—	—	5.6	灰色		白岩系	—	内面目跡
12	4	表土一括	陶器片口	—	—	—			白岩系	不明	30

古錢一覧表

No	出土地点	錢貨	直径(mm)	重量(g)	初期年代(西暦)	備考	参考
13	表土一括	寛永通寶(波錢)	28	4.42	明和5年(1768)	11波 4文銭	30
14	表土一括	寛永通寶	24	1.93	元文4年(1740)		30
15	表土一括	寛永通寶	23	2.23	元文4年(1740)		30

第2表 越中畠IV遺跡出土遺物一覧表

7. まとめ

調査区は全面にわたって開田時の整地によって削平、攪乱を受けており、予想された縄文時代の遺構や遺物はほとんど検出されなかった。出土遺物はほとんど近世から現代にかけての陶磁器破片で、その大多数は肥前陶磁器と秋田県鹿角市の白岩系陶器で占められる。肥前陶磁器は18世紀に大衆化の段階に入るが、本遺跡で出土している肥前陶磁器はこの時期のものであり、その流通範囲をうかがい知ることのできる資料である。また、白岩系陶器の出土は、本遺跡の立地する西和賀地方の秋田県との結び付きの強さを示すものであろう。しかし、それらからは本遺跡で検出された掘立柱建物跡をはじめとする遺構の性格を明らかにすることは不可能であり、その性格に関しては沢内村を含む西和賀地区における比較資料の増加をまって、今後の検討課題としたい。

写 真 図 版



調査区全景



基本層序
写真図版 1 調査区全景・基本層序



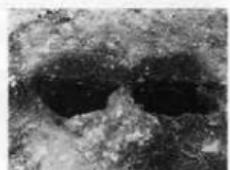
掘立柱建物跡 完掘



c - d 断面



e - f 断面



i - j 断面



m - n 断面



q - r 断面



底面に柱痕跡のある柱穴状土坑(q - r)

写真図版 2 掘立柱建物跡群



1・2・3号溝跡



1号溝跡 断面



2号溝跡 断面



3号溝跡 断面

写真図版3 1・2・3号溝跡

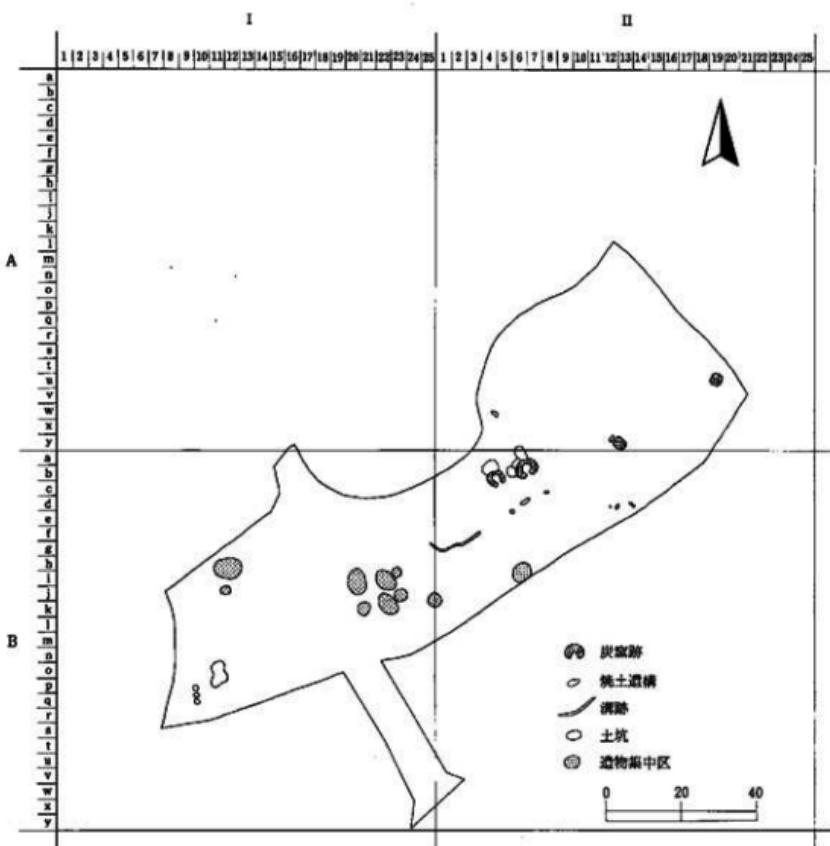


写真図版 4 出土遺物 - 1

V. 越中畠 V 遺跡



第1図 遺構周辺の地形図



第2図 越中烟V遺跡遺構配置図

V. 調査の結果 越中畠V遺跡

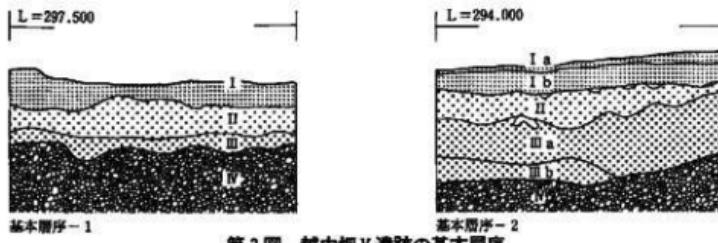
1. 遺跡および周辺の地形（第1図）

東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の西約1.7 kmに位置し、和賀川支流の鬼ヶ瀬川によって形成された洪積段丘の白木野面および越中畠面に立地する。調査区は鬼ヶ瀬川支流の越中畠川の南岸にあり、標高は約293 mである。調査区の現況は山林である。

2. 基本層序（第3図、写真図版2）

調査区は南北に90 m、東西150 mと広範囲であり、全面的に北側が南側に比べ5 m程度高い緩斜面を成していること、また、西端に縄文時代のものと思われる旧沢跡などが検出されていることなどから、基本土層は数カ所で確認したが、以下にあげるのは、遺物の多数出土している遺跡中央の西寄りの地点におけるもの（基本層序-1）と沢の東側南端におけるもの（基本層序-2）である。

- I層 黒褐色土 層厚10~20 cm 表土 植物根の混入が多い。
II層 黒褐色土 層厚10~30 cm I層と同様、表土であるが、I層と比べ高含水である。
III層 褐色土 層厚10~15 cm 下層から遺物が出土している。
IV層 明黄褐色土 層厚は不明である。部分的に酸化し、白色化している。下層には礫が混じる。
沢の東側においては、I層、III層にそれぞれ下層への漸移層（Ib, IIIb）が部分的に存在する。



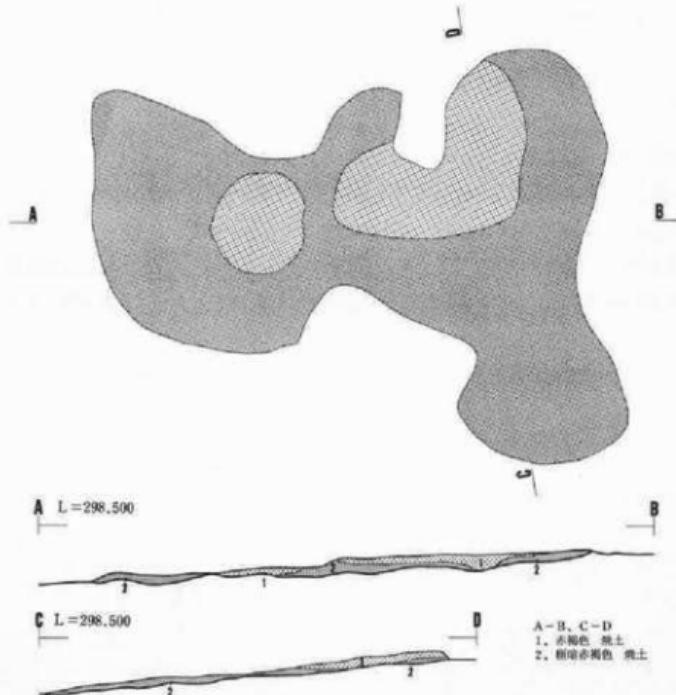
第3図 越中畠V遺跡の基本層序

3. 焼土遺構

1号焼土遺構

遺構(第4図、写真図版3)

調査区の西端に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は 560×390 cm、層厚は最大で 20 mm である。出土遺物はなく、時期は不明である。

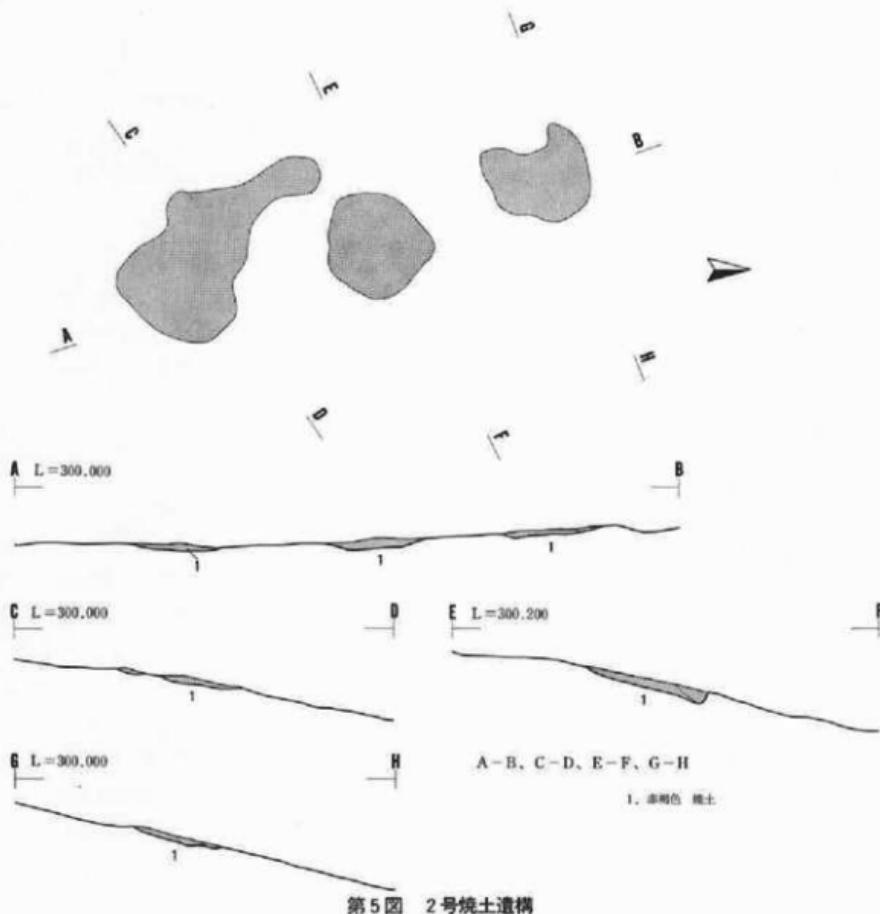


第4図 1号焼土遺構

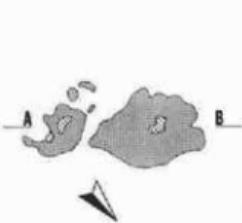
2号焼土遺構

遺構（第5図、写真図版3）

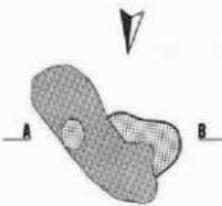
調査区の西端に位置する。大きく3ヶ所から形成され、平面形は南側から順に不整形、円形、不整形を呈し、規模は $25 \times 13\text{ cm}$ 、 $11 \times 11\text{ cm}$ 、 $12 \times 11\text{ cm}$ である。層厚は最大で 10 cm である。出土遺物はなく、時期は不明である。



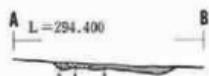
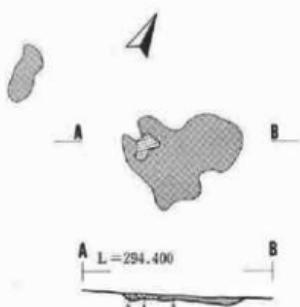
第5図 2号焼土遺構



3号焼土遺構
A-B
1. にじい赤褐色 焼土
2. 赤褐色 焼土



4号焼土遺構
A-B
1. にじい赤褐色 焼土
2. 赤褐色 焼土
3. 棕褐色褐色 焼土



5号焼土遺構
A-B
1. にじい赤褐色 焼土
2. 赤褐色 焼土

第6図 3・4・5号焼土遺構

4号焼土遺構

遺構 (第6図、写真図版4)

調査区の北側斜面に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は 95×43 cm、層厚は最大で 6 cm である。出土遺物はなく、時期は不明である。

4号焼土遺構

遺構 (第6図、写真図版4)

調査区の北側斜面に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は 86×52 cm、層厚は最大で 7 cm である。出土遺物はなく、時期は不明である。

5号焼土遺構

遺構 (第6図、写真図版4)

調査区の中央に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は 63×48 cm、層厚は最大で 4 cm である。出土遺物はなく、時期は不明である。

4. 炭窯

1号炭窯

遺構(第7図、写真図版5)

調査区の北側斜面に構築されており、2号炭窯の西に隣接する。現地表面において中央の凹んだマウンド状を呈している。窯本体は旧表土にIV層起源の黄褐色土を盛って構築されており、隣接して黄褐色土採取のための土坑が掘られている。燃焼部の底面には、焼土が形成されており、その下には湿気抜きのための木材が敷かれている。埋土は4層に分けられるが、炭化物、焼土の混じり方によって細分される。規模は $4.4 \times 4.1\text{m}$ である。

出土遺物はないが、雑物撤去時に現地表面で検出されていることから、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

2号炭窯

遺構(第8図、写真図版6)

調査区の北側斜面に構築されており、1号炭窯の東に隣接する。現地表面において中央の凹んだマウンド状を呈している。窯本体は旧表土にIV層起源の黄褐色土を盛って構築されており、隣接して黄褐色土採取のための土坑が2基掘られている。燃焼部の底面には焼土が形成されており、その下には湿気抜きのための木材が敷かれている。埋土は4層に分けられるが、炭化物、焼土の混じり方によって細分される。規模は $4.6 \times 3.7\text{m}$ である。

出土遺物はないが、雑物撤去時に現地表面で検出されていることから、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

3号炭窯

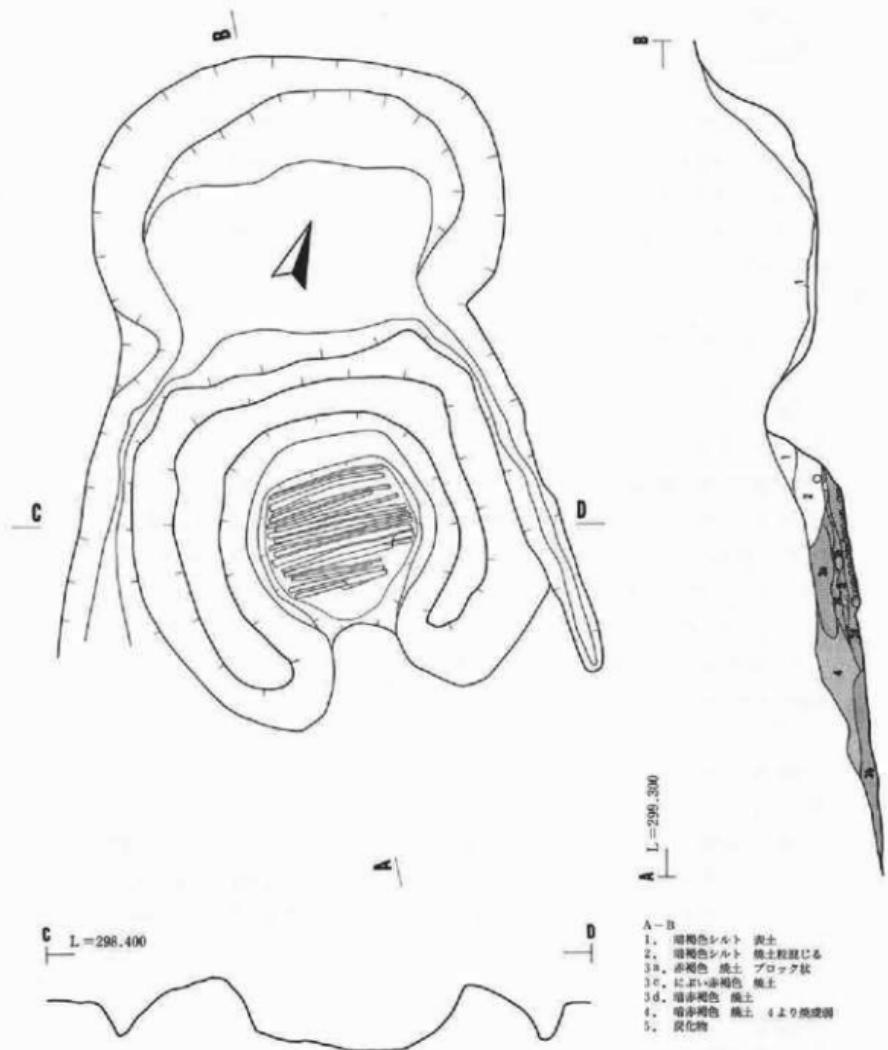
遺構(第9図、写真図版7)

調査区の東側斜面に構築されている。斜面を掘り込んでおり、壁に頬するものは検出されなかつたが、旧表土にIV層起源の黄褐色土を盛って構築されており、表層は焼成を受けて赤色変化している。規模は $4.1 \times 3.4\text{m}$ である。赤色変化している最大層厚は12mmである。出土遺物はない。雑物撤去時に検出されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

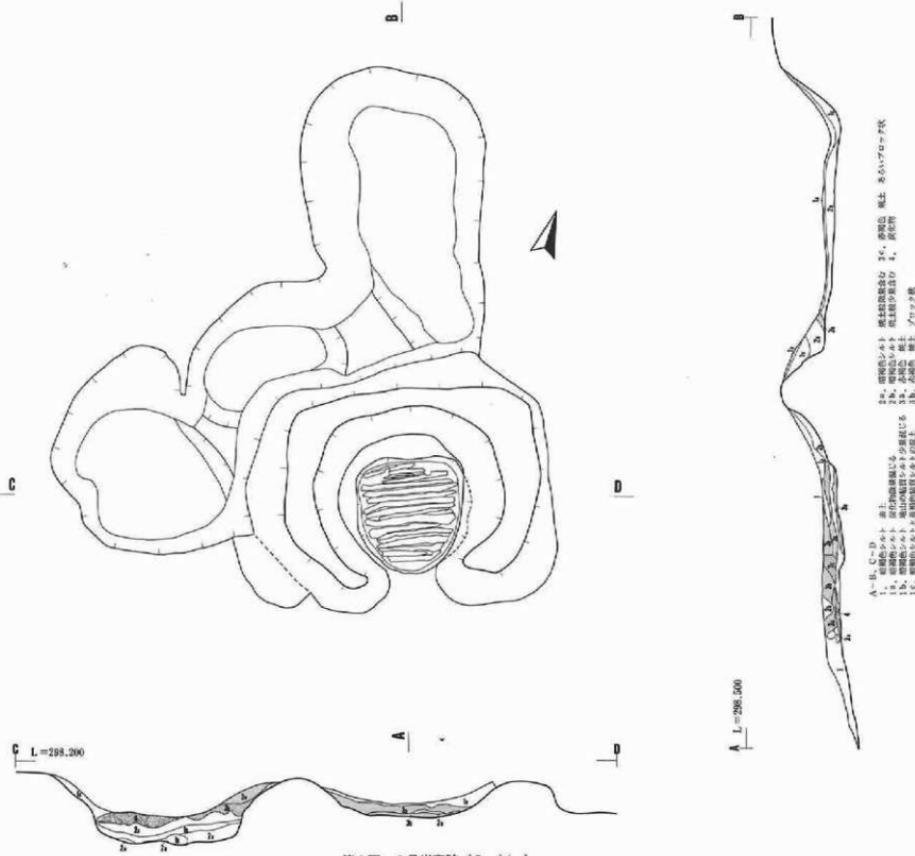
4号炭窯

遺構(第9図、写真図版7)

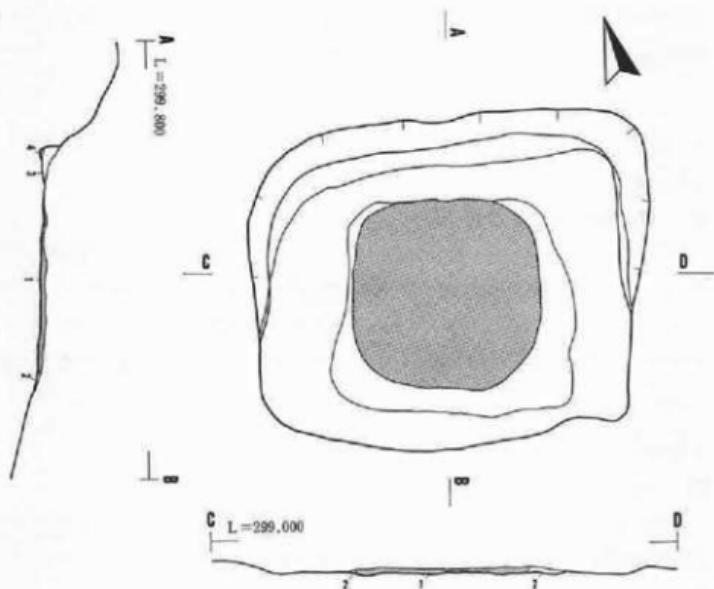
調査区の中央部の平場に構築されている。壁に頬するものは検出されなかつたが、旧表土にIV層起源の黄褐色土を盛って構築されており、表層は施成を受けて赤色変化している。全体の



第7図 1号炭窓跡 ($S = 1/100$)



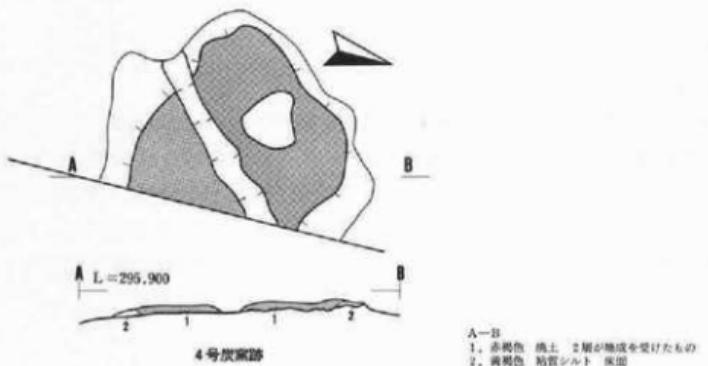
第8図 2号炭窯跡 ($S = 1/60$)



3号炭窯跡

A-B, C-D

1. 赤褐色 地土。2層が焼成を受けたもの
2. 黄褐色 粘質シルト 床面
3. 墓褐色 シルト 壁の刷毛
4. 二氧化物



第9図 3・4号炭窯跡 ($S = 1/50$)

規模は不明である。赤色変化している最大層厚は 10 mm である。出土遺物はない。雑物撤去時に検出されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

5. 土坑

1号土坑

遺構（第 10 図、写真図版 8）

調査区の中央に位置し、1号炭窯に近接する。平面形は開口部が不整な梢円形、底部は隅丸長方形を呈し、断面形は皿形である。規模は開口部径 97×76 cm、底部径 74×50 cm で、深さは中心部で 32 cm である。底面はⅣ層を掘込んでおり、壁は底面からほぼ直立する。出土遺物はないが、現地表面で確認されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

2号土坑

遺構（第 10 図、写真図版 8）

調査区の中央に位置し、1号炭窯に近接する。平面形は開口部、底部とも斜面の上方である北側が凹む隅丸長方形を呈する。断面形は皿形である。規模は開口部径 257×86 cm、底部径 209×60 cm で、深さは中心部で 40 cm である。底面はⅣ層を掘り込んでおり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。現地表面で確認されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

3号土坑

遺構（第 10 図、写真図版 8）

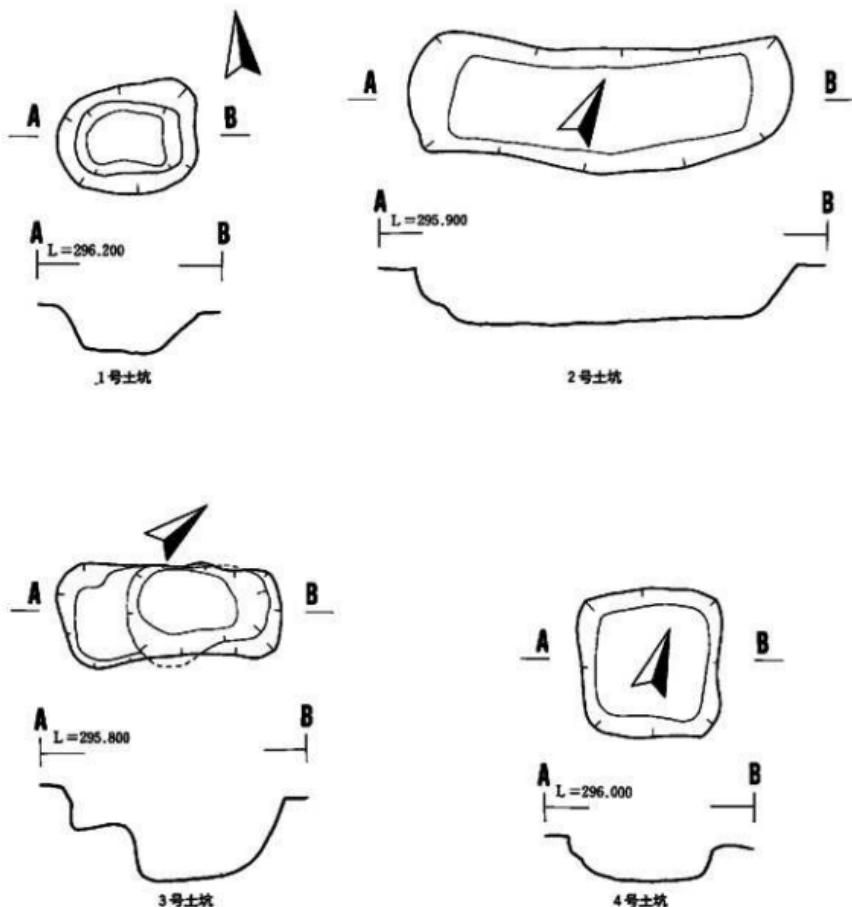
調査区の中央に位置し、1号炭窯に近接する。平面形は開口部、底部とも隅丸長方形を呈し、断面形は皿形であるが、底面はもう一段掘り込んである。規模は開口部径 152×61 cm、底部径 135×69 cm で、深さは浅い段で 29 cm、掘り込んである段で 57 cm である。底面はⅣ層を掘り込んでおり、壁は浅い段がほぼ直立して、掘り込んである段が緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。現地表面で確認されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。

4号土坑

遺構（第 10 図、写真図版 8）

調査区の中央に位置し、1号炭窯に近接する。平面形は開口部、底部ともほぼ正方形を呈し、

断面形は皿形である。規模は開口部径 103×95 cm、底部径 80×78 cm で、深さは中心部で 27 cm である。底面は IV 層を掘り込んでおり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。現地表面で確認されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。



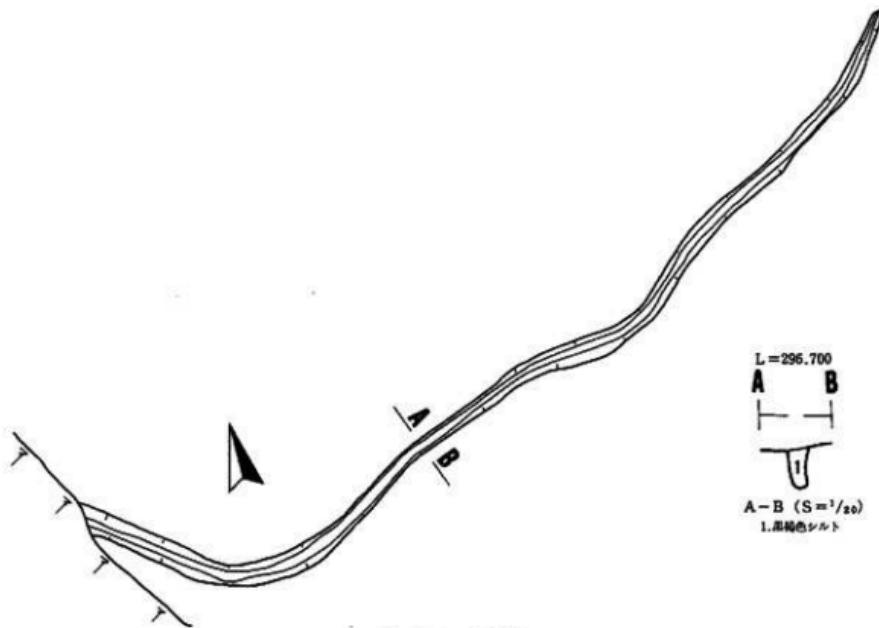
第10図 1・2・3・4号土坑

6. 溝跡

1号溝跡

遺構(第11図、写真図版8)

調査区の北側斜面にあり、斜面に平行に続く。規模は長さ15m、幅は開口部で25cm、深さは15cm程度である。壁はほぼ直立する。埋土は単層である。遺物は出土していないが、雑物撤去時に現地表面で検出されており、きわめて現在に近い時期のものと推定される。



第11図 1号溝跡

7. 造構外の出土遺物

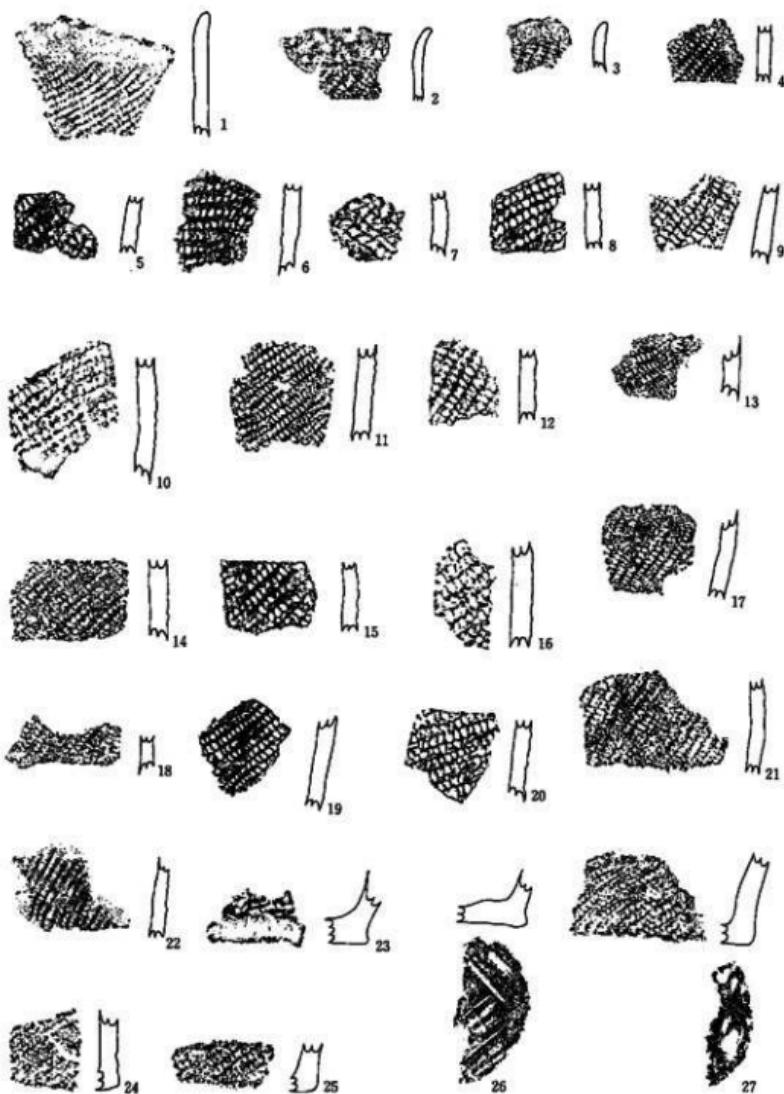
(1)縄文時代の土器（第12図、写真図版10）

ほとんどの土器が調査区の西半から出土している。すべて粗製土器の破片で、接合・復元できた個体はない。1～3は口縁部破片、4～22は体部破片、23～27は底部破片である。すべて胎土から縄文時代中期に属するものと思われる。

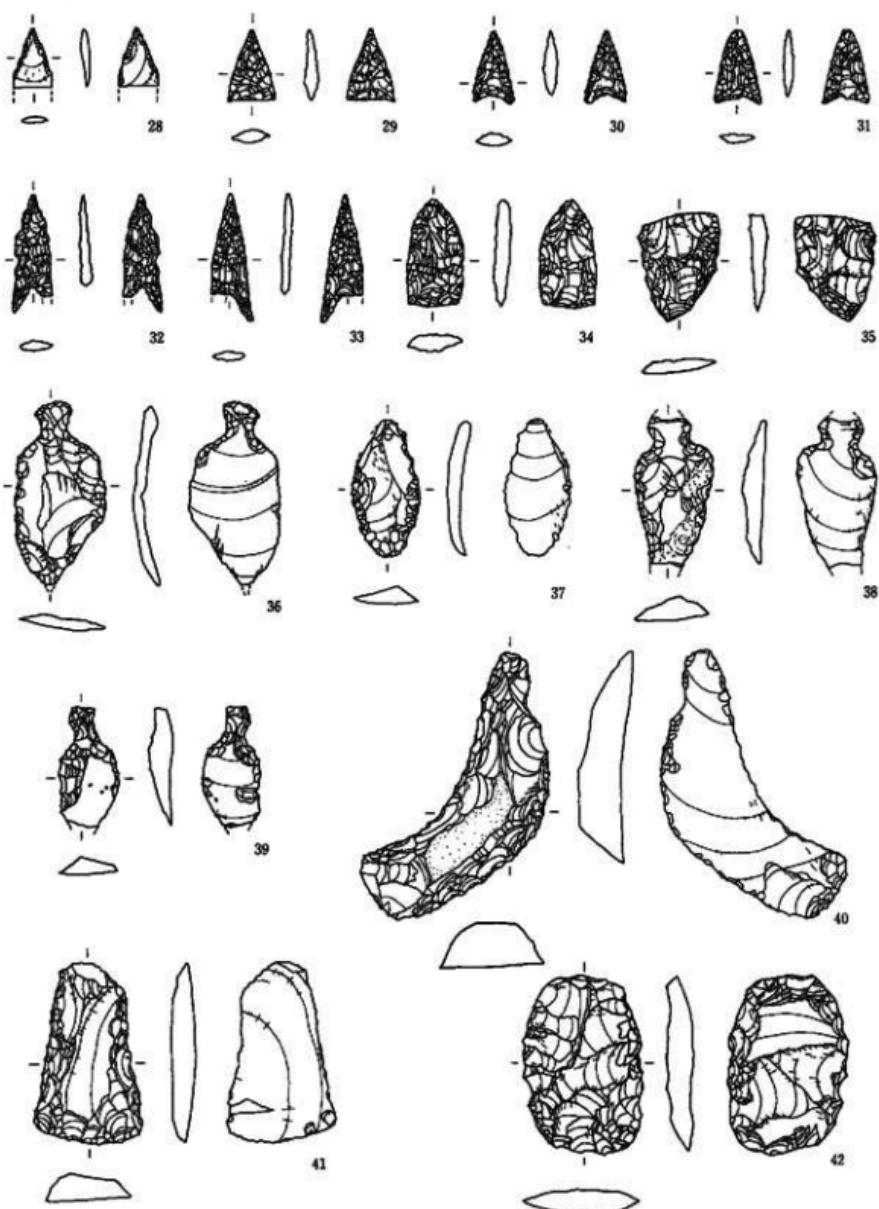
(2)石器（第13～19図、写真図版11～14）

出土した石器のうち、形の判明する定形的なものはすべて図示した。この他に石器集中区からは多数剥片・石屑が出土しているが、微小な細片であるため実測は割愛した。以下に記述する石器類の大半は石器集中区を中心に出土したものだが、出土状況からは時代が把握できないので、すべて器種ごとに一括して説明する。

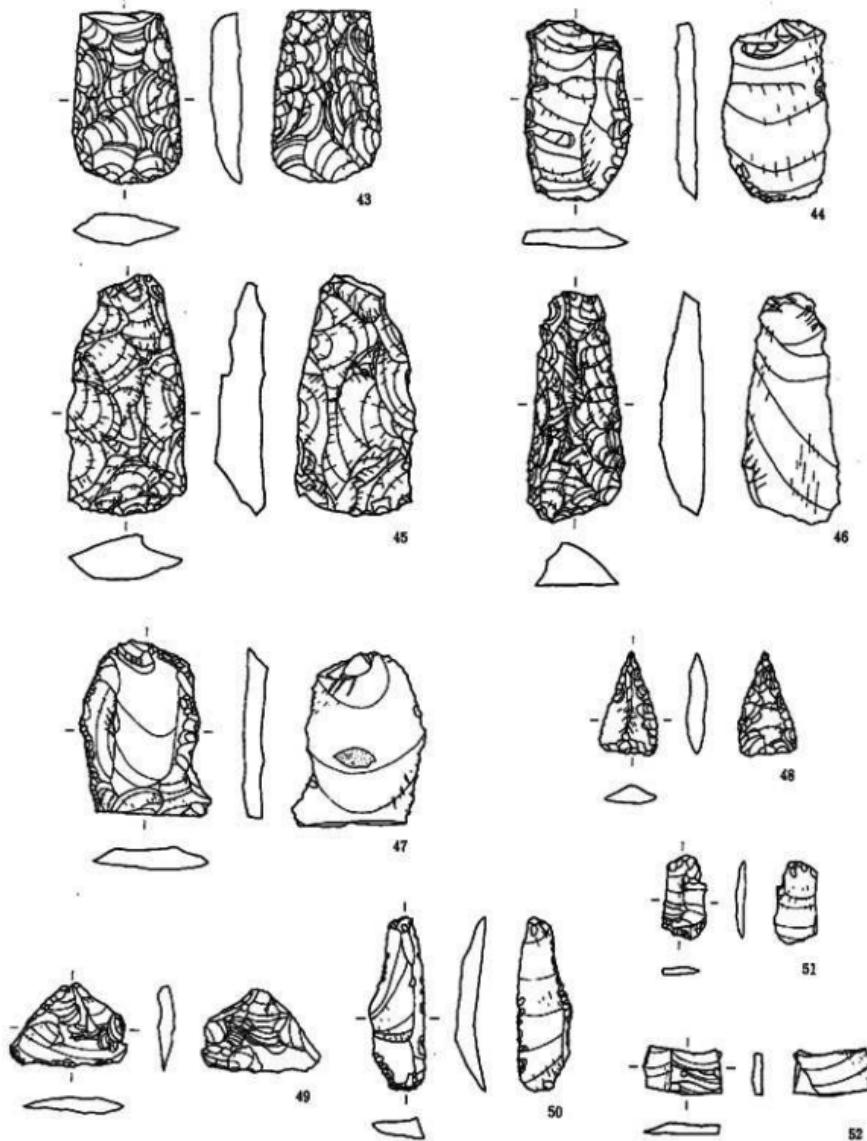
- a. 石鏃 28～33の6点が出土している。すべて無茎鏃である。28、29は平基である。30、31は抉りが浅い。32、33は抉りが深く、細身であるが、32は端部が欠損しており、刃部も破損が著しい。33も端部が欠損している。
- b. 尖頭器 34・35の2点が出土している。
- c. 石匙 36～40の5点が出土している。いずれも縦形石匙である。
- d. 削・搔器 41～44の4点が出土している。42は剥片の周辺に丁寧な剥離調整を施しており、削・搔器としての機能を有するものである。
- e. 石範 45・46の2点が出土している。
- f. 不定形石器 47～85の39点が出土している。前述のように、本遺跡では石器集中区から多数の剥片・石屑が出土しているが、刃部調整の施されているもののみを掲載した。
- g. 石斧 86・87の2点が出土している。86は両刃の打製石斧で、基部のごく一部に自然面を残す。87は片刃の打製石斧で、片側の一部に自然面を残したまま剥離調整を施してある。
- h. 磨石 88の1点が出土している。



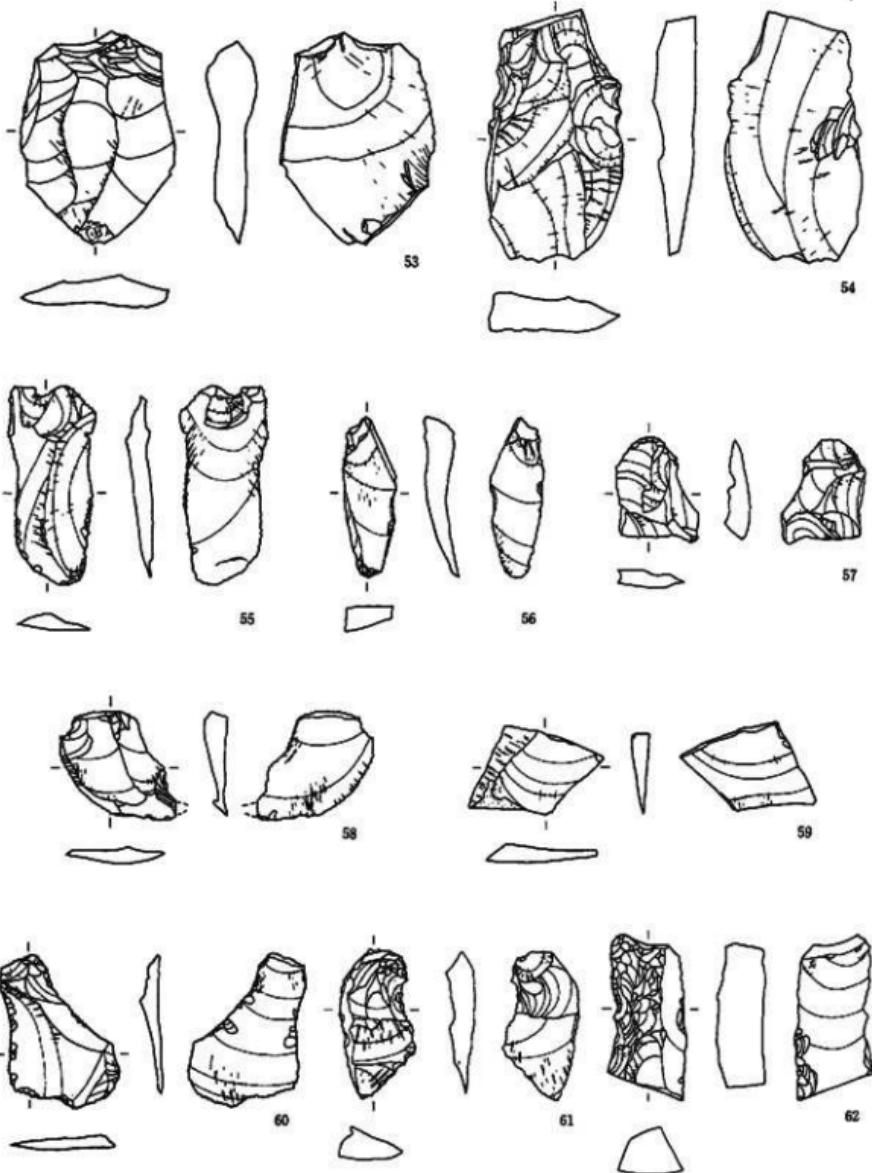
第12図 遺構外出土遺物-1



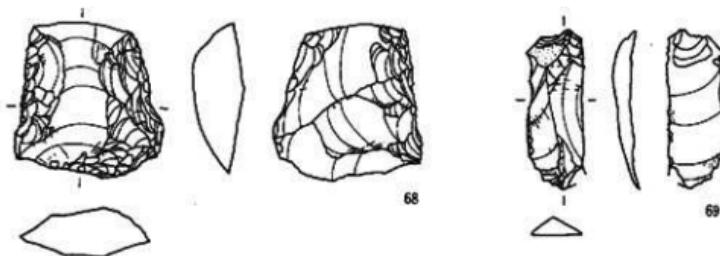
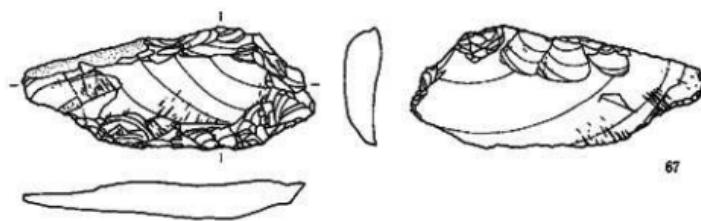
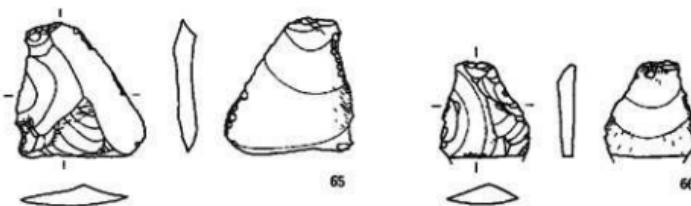
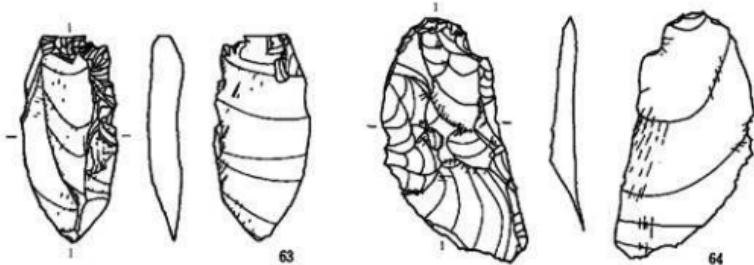
第13図 遺構外出土遺物-2



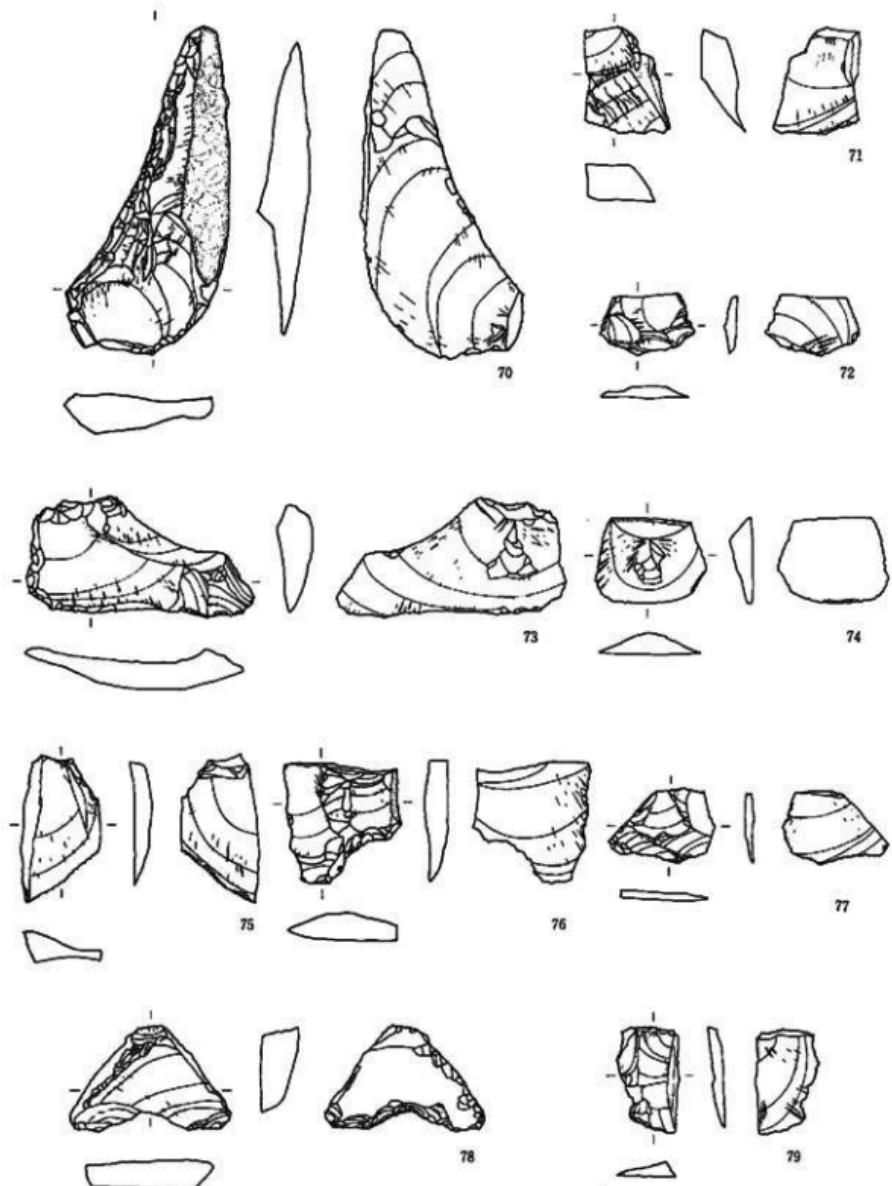
第14図 遺構外出土遺物-3



第15図 遺構外出土遺物－4



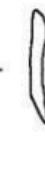
第16図 遺構外出土遺物-5



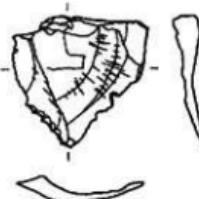
第17図 遺構外出土遺物-6



80



81



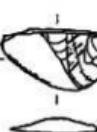
82



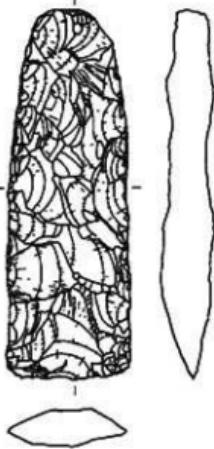
83



84



85

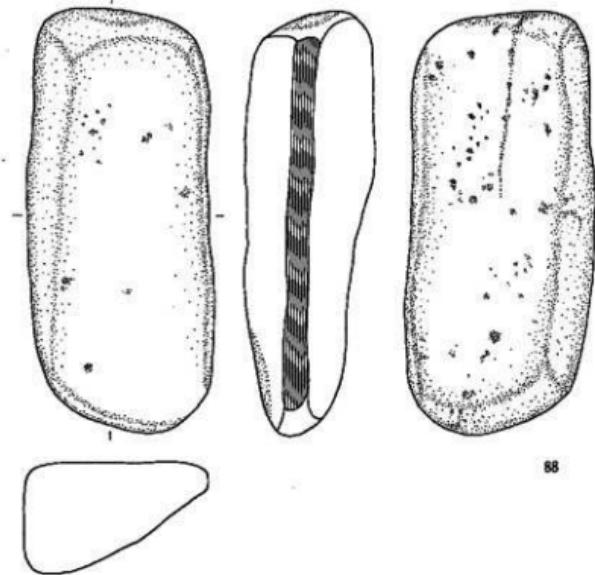


86



87

第18図 遺構外出土遺物-7



88

第19図 造構外出土遺物－8

越中畠V遺跡出土石器一覧表(1)

登録番号	遺構・地点	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	生成年代	等級
28 0009	B If 6	石鎌	2.5	1.6	0.4	1.2	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
29 0014	B Ij 5	石鎌	2.5	1.7	0.5	1.3	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
30 2199	B Ij 21	石鎌	4.1	1.4	0.4	1.5	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
31 1476	B I H 124	石鎌	4.5	1.5	0.3	1.3	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
32 59	B I H 12	石鎌	2.2	1.3	0.5	1.15	流紋岩白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
33 213	B I H 12	石鎌	2.0	1.4	0.3	0.5	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
34 1119	B I k 23	尖頭器	3.7	2.0	0.6	4.4	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
35 1120	B I k 23	尖頭器	3.8	2.8	0.7	5.9	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
36 33	B I G 11	石匙	4.1	2.0	0.8	4.8	粘板岩	和賀仙人	古生界	79
37 141	B I 19	石匙	10.2	3.3	1.5	60.0	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
38 313	B I	石匙	4.8	2.3	0.6	6.95	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
39 501	B I	石匙	5.1	2.8	0.8	9.2	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
40 123	B I I 111	石匙	5.3	3.1	0.4	7.98	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
41 83	B I G 11	削・搔器	5.4	3.8	0.9	12.52	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
42 1477	B I j 23	削・搔器	6.3	4.2	0.9	30.6	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
43 88	B I g 12	削・搔器	5.9	3.8	1.1	30.43	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
44 1811	B I j 21	削・搔器	7.4	5.4	1.7	53.1	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
45 251	B I G 12	削・搔器	5.0	3.8	0.7	8.75	流紋岩細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
46 1101	B I h 20	石箇	8.4	4.2	1.7	53.6	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
47 1118	B I k 20	石箇	8.0	3.4	1.6	41.7	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
48 1004	B If 19	不定形	6.3	3.7	0.7	21.2	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
49 182	B I J 11	不定形	2.9	4.1	0.6	5.75	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
50 47	B I G 11	不定形	6.0	4.2	0.7	26.8	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	79
51 413	B I	不定形	5.1	1.9	0.9	8.9	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
52 401	B I	不定形	2.9	1.5	0.3	1.26	流紋岩細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
53 161	B I H 12	不定形	6.9	2.0	0.7	26.8	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
54 1251	B I	不定形	8.8	4.8	1.5	66.8	流紋岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
55 55	B I H 11	不定形	3.5	2.7	0.6	6.9	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
56 56	B I H 11	不定形	3.6	3.4	0.7	7.2	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
57 68	B I G 12	不定形	5.6	1.8	1.0	10.53	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
58 69	B I G 12	不定形	5.0	3.8	0.7	8.75	流紋岩白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
59 210	B I H 12	不定形	1.5	2.7	0.4	2.48	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	80

越中畠V遺跡出土石器一覽表(2)

登録号	遺構・地点	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	生成年代	参考
60 361	不明	不定形	2.9	4.0	0.8	7.2	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
61 227	B1H2	不定形	5.2	2.5	1.3	12.17	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
62 178	B1J2	不定形	5.3	2.6	1.6	29.45	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
63 1001	B1J21	不定形	7.2	3.4	1.1	27.5	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
64 0051	B1h6	不定形	8.6	4.9	0.9	25.0	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
65 199	B1J12	不定形	4.6	4.4	0.8	13.98	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
66 221	B1H12	不定形	5.5	2.0	0.8	7.35	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
67 316	不明	不定形	3.3	3.1	0.7	6.16	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
68 365	不明	不定形	4.2	4.0	0.9	16.49	硅質泥岩	和賀仙人	古生界	81
69 209	B1H12	不定形	2.3	2.7	0.4	2.1	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	80
70 500	B1	不定形	5.2	10.4	1.9	80	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
71 18	B1N11	不定形	5.3	5.1	1.7	51.38	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
72 0024	B1I5	不定形	3.0	3.9	0.8	7.3	硬質泥質	奥羽山地	新第3系中新統	81
73 411	B1	不定形	3.7	2.9	1.3	12.75	硅質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
74 414	B1	不定形	4.8	2.7	1.0	9.9	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
75 434	不明	不定形	2.0	3.2	0.5	2.9	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
76 442	B1	不定形	3.1	2.8	0.4	3.38	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
77 20	B1N11	不定形	3.0	5.5	1.3	22.84	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
78 14	B1N11	不定形	3.7	2.2	0.5	3.53	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
79 21	B1N11	不定形	4.0	7.8	1.3	31.64	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
80 26	B1G11	不定形	3.4	3.5	0.9	7.25	流紋岩質白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
81 177	B1K12	不定形	4.5	4.6	0.8	20.86	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
82 151	B1G12	不定形	4.0	2.0	1.0	7.44	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
83 243	B1H12	不定形	4.3	3.5	0.7	6.88	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
84 262	B1G12	不定形	43	44	11	20.84	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
85 362	不明	不定形	36	21	0.7	456	硬質泥質凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統	81
86 0001	A1P12	石斧	12.9	4.4	1.9	104.9	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	82
87 0053	B1	石斧	13.3	5.9	2.6	174.0	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統	82
88 505	B1	磨石	14.5	64	45	570	粘板岩	和賀仙人	古生界	82

8.まとめ

越中畠V遺跡の調査は平成3・4年度の2カ年にわたって実施された。その結果、焼土遺構6基、炭窯4基、土坑4基、溝1条を検出した。また、掲載した土器、石器のほかに、剝片・石屑が少量出土している。以下、遺構・遺物について若干の考察を加えてまとめに替えたい。

(1)遺構

帰属時代が明確な遺構は、きわめて現在に近い時期に比定される炭窯と、これに伴うと推定される土坑・溝である。炭窯はいずれも現地表面で確認されており、構築時期は、時代的には昭和初期に比定されるものと思われる。また、これに近接して検出された土坑、溝跡も炭窯と同様に現地表面で雑物撤去時に検出されており、セット関係を持つものであろう。これらは最初に想定された旧石器・縄文時代の遺構ではないが、近現在の民俗学の事例としては良好な資料になり得るであろう。なお、燃焼部の底面に形成された焼土の下に敷かれていた湿気抜きのための木材については、分析・鑑定結果を付編に掲載している。

5基検出された焼土遺構は、伴出遺物を伴わず、帰属時期は不明であるが、検出面からは縄文時代の石器・剝片・石屑類が集中して出土しており、この時代のものである可能性は高い。なお、遺構ではないが、遺物集中区のうち調査区中央を流れる沢の付近では、旧沢跡を検出している。この旧沢跡については、堆積土の花粉分析を付編に掲載している。

(2)遺物

縄文時代の石器・剝片・石屑類が集中して出土している箇所が確認されているが、出土した土器はすべて粗製土器の細片であり、接合・復元できたものはない。また、定形的な石器の出土はごく少数で、ほとんどが剝片・石屑類である。

(3)まとめ

2カ年にわたる調査によって、縄文時代の石器・剝片・石屑類が集中して出土している箇所が確認されており、縄文時代にはなんらかの生活の場として利用されていたことが推定される。また、きわめて現在に近い時期においては木炭生産の場として利用されていたことが判明しており、民俗学的に良好な資料を提供することができた。

VI. 分析・鑑定の結果

1. 湯田町越中畠Ⅴ遺跡出土材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は1点で、昭和初期？と推定される炭焼き窯から検出されたもので窯の敷板として使用されたものと考えられている。試料の大部分は炭化していたが、一部炭化せずに残存していたところから同定用の材片を採取した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版1)も作製した。なお作製したプレパラートは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料はクリ(Castanea crenata)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種的一般的な性質などは次のようなものである。

環孔材で孔隙部は4～5列、孔隙外では火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では梢円形、小道管は横断面では角張った梢円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單(～2)列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽されるブナ科の落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、梢木や海苔粗朶などの用途が知られている。



木口(×40)



柾目(×100)
クリ



板目(×100)

写 真 図 版



平成 3 年度 調査区全景（南から）



平成 4 年度 調査区全景（北西から）

写真図版 1 調査区全景



作業風景



作業風景



基本土層（西侧）



基本土層（東側）



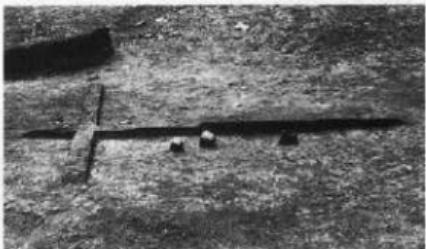
沢跡断面
写真図版2 近景・基本層序



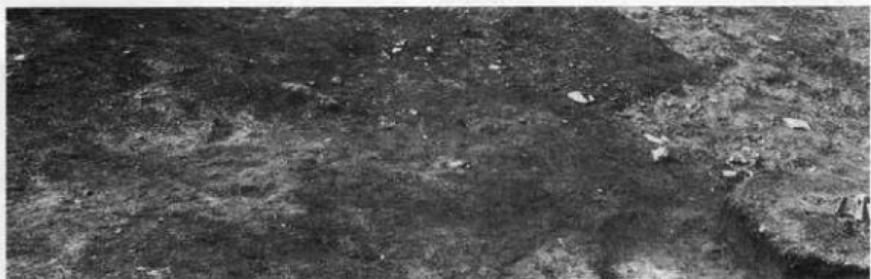
1号焼土 検出



1号焼土 断面 1



1号焼土 断面 2



2号焼土 検出



2号焼土 断面 1



2号焼土 断面 2

写真図版 3 1・2号焼土遺構



3号焼土 検出



断面



4号焼土 検出



断面



5号焼土 検出



断面

写真図版 4 3・4・5号焼土遺構



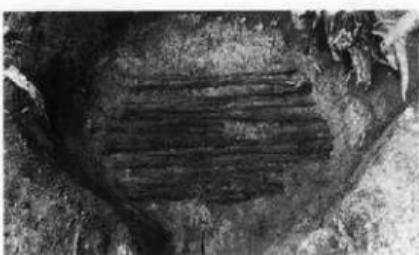
1号炭窯跡 実掘平面



1号炭窯跡 断面 1



1号炭窯跡 断面 2



1号炭窯跡底面の温気抜き材

写真図版 5 1号炭窯跡



2号炭窯跡 実掘平面



2号炭窯跡 断面 1



2号炭窯跡 断面 2



2号炭窯跡底面の温気抜き材
写真図版 6 2号炭窯跡



3号炭窯跡 検出



3号炭窯跡 断面



4号炭窯跡 検出



4号炭窯跡 断面

上A-B、下C-D

写真図版7 3・4号炭窯跡



1号土坑 完掘平面



2号土坑 完掘平面



1号溝跡 完掘



3号土坑 完掘平面



1号溝跡 断面



4号土坑 完掘平面

写真図版 8 1・2・3・4号土坑、1号溝跡



H10区 遗物出土状况



I12区 遗物出土状况



G12区 遗物出土状况



H12区 遗物出土状况



K22区 遗物出土状况

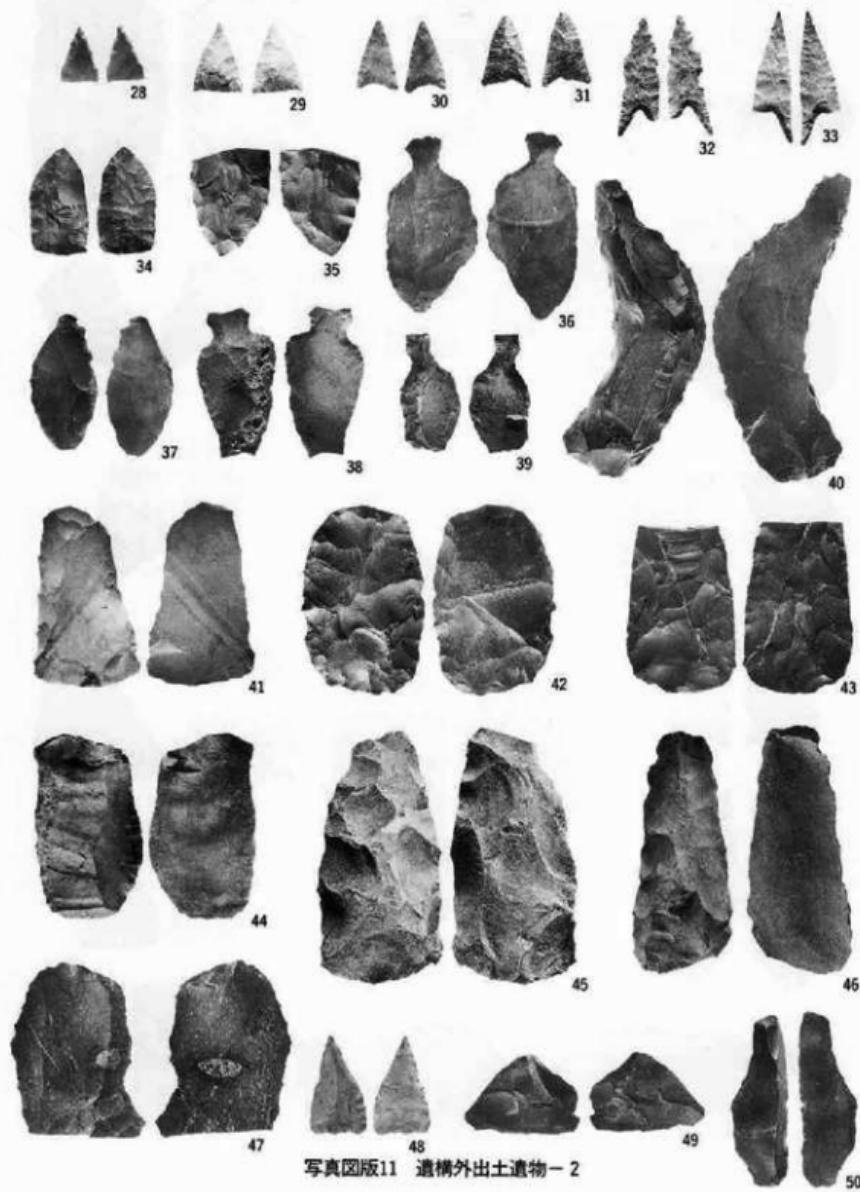


J21区 遗物出土状况

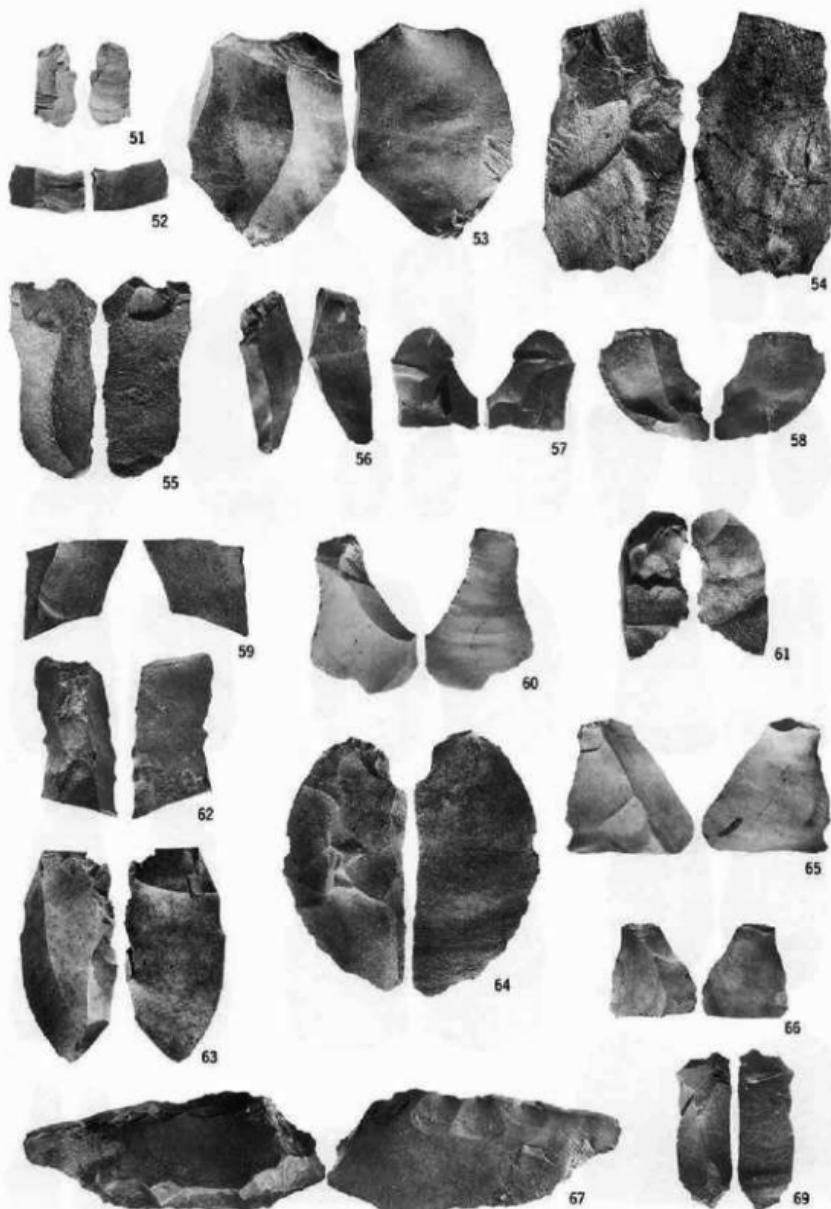
写真図版 9 B-I区 遺物出土状况



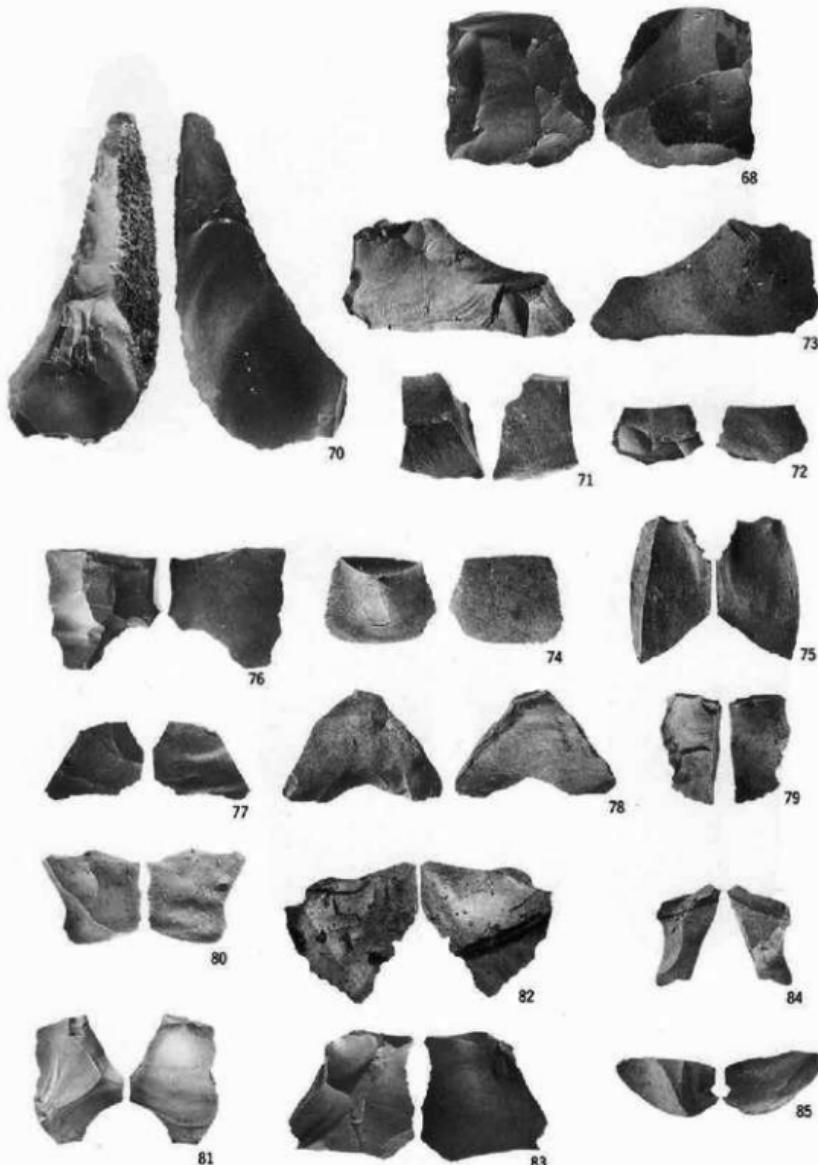
写真図版10 遺構外出土遺物－1



写真図版11 遺構外出土遺物-2



写真図版12 遺構外出土遺物-3



写真図版13 遺構外出土遺物 - 4



86

87



88

写真図版14 遺構外出土遺物－5

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 高橋重實

副所長 高橋敬明

[管理課]

管理課長 澤田 寛

主事 佐藤 理

〃 久保田 幸恵

嘱託 吉田 次夫

〃 野崎 他

[調査課]

調査課長 鈴木 恵治

課長補佐 三浦 謙一

〃 高橋 與右衛門

主任文化財専門調査員 菊池 強一

〃 渡辺 洋一

〃 高橋 正之

〃 工利 幸紀

〃 中重 文介

〃 佐々木 清文

〃 高橋 橋義

文化財専門調査員 高齋 孝

〃 斎藤 千雄

〃 川村 均

〃 鈴木 行格

〃 伊東 充雄

〃 吉田 雄明

〃 斎藤 敏浩

〃 神高 一真

〃 高橋 真宗

〃 小酒 一孝

〃 鎌田 勉

〃 小山内 透

文化財専門調査員 遠子 博務彦

建克政 宏則

本坂花 人見拓

佐々木 昭造

渡辺雅 舟磨

高濱アリ 勝雅

星羽高 倍直

木村勝 柴木精

佐々木田 部雅

渡辺柳 上木精

千高村 錦田葉

柳千高 潤葉

佐佐木 橋千高

佐藤 善英

佐藤 善浩

佐藤 善修

佐藤 善博

佐藤 善り子

佐藤 昭太郎

佐藤 八重子

佐藤 平祐

佐藤 幸子

[資料課]

資料課長 村松義夫

主任文化財専門調査員 駒嶺高幸

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第201集

越中畠IV・越中畠V遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下販間11-185

TEL (0196) 38-9001・9002 FAX (0196) 38-8563

印刷 駒山口北州印刷株式会社

〒020-01 岩手県盛岡市青山四丁目10-5

TEL (0196) 41-0585
